810.7-To12ウ
1200500753268
1.7
12
(7)

日本語教科用

ハナシコトバ學習指導書

上

始

810.7
To12

日本語教科用

ハナシコトバ學習指導書

上

昭和六年
文部省圖書

908
51

目次

日本語教科用 ハナシコトバ編纂趣意……一
日本語教科用 ハナシコトバ學習指導書 上 凡例……六
母音口形圖解說……二十
第一課……三十一
第二課……三十七
第三課……四十二
第四課……四十八
第五課……五十三
第六課……六十
第七課……六十四
第八課……六十九
第九課……七十五
第十課……八十一
第十一課……八十六

第十二課……九十一
第十三課……九十六
第十四課……百
第十五課……百四
第十六課……百十
第十七課……百十六
第十八課……百二十
第十九課……百二十五
第二十課……百三十
第二十一課……百三十五
第二十二課……百三十九
第二十三課……百四十三
第二十四課……百四十八
第二十五課……百五十三
第二十六課……百五十九
第二十七課……百六十四
第二十八課……百七十

第二十九課……百七十六
第三十課……百八十二
第三十一課……百八十七
第三十二課……百九十三
第三十三課……百九十八
第三十四課……二百三
第三十五課……二百九
第三十六課……二百十三
第三十七課……二百十九
第三十八課……二百二十四
第三十九課……二百二十九
第四十課……二百三十四
第四十一課……二百三十九
第四十二課……二百四十五
第四十三課……二百五十
第四十四課……二百五十四
第四十五課……二百五十九

目次

第四十六課……二百六十四
第四十七課……二百六十九
第四十八課……二百七十四
第四十九課……二百八十
第五十課……二百八十六

附錄

日本語教科用　ハナシコトバ編纂要旨……一
日本語教科用　ハナシコトバ學習指導書　上　凡例　華語譯……五
日本語教科用　ハナシコトバ上　華語譯……七

終

日本語教科用

ハナシコトバ編纂趣意

一　目的

ハナシコトバは、極めて簡易で且必須な日本語の話言葉を、主として青少年男女に學習せしめる目的で編纂したものである。

日本語の學習には、口から耳へのいはゆる話言葉から入る方法と、目に訴へるいはゆる書き言葉から入る方法とがある。しかし、書き言葉を學習せしめるにしても、眞に自己のものたらしめるためには、話言葉の修得がその前提となるべきである。しかも、本書は卑近な日常語の學習が目的であるから、その意味からも、話言葉を學習せしめることとしたのである。

一　材料

本書は、基本的な語彙と構文とによつて、日常生活を表はすこととし

た。

語彙は約六百選んだが、學習指導書に於て相當數補つた。元來、語彙は、言語生活を圓滑に遂行する上には、多ければ多いほど好都合であるが、初歩の段階に於ては、學習上の制約を考慮して、その中で最も重要なものを選び、これが運用を十分ならしめることが必要である。本書に於ては、かやうな觀點から、學習者にとつて重要であると考へられるものを主として選んだのである。しかし、語彙の運用を十分ならしめるには、構文形式を與へなければならない。構文形式は、或一定の思想・感情を表現する語の結合形式である。隨つて、日本語の學習には、語彙の修得と構文形式の修得とが必然的に要求されるのであるが、構文形式の種類は雜多であり、量も少くはないから、その基本的なものを確實に修得することは、日本語に早く習熟する所以である。蓋し、構文形式に習熟してをれば、語彙は必要に應じて適宜これを補ふことができるか

らである。たゞ本書には、話言葉の實際に卽さないものもないではないが、これは易より難に入る言語訓練の過程上必要な手段として收めたのであつて、それらは學習の進むにつれて次第に整理する方針を採り、以て日本語の醇正を期した。

一　組織

本書は上・中・下の三冊に分つて編纂した。その「上」に於ては、主として主語と述語とから成る程度の構文形式及びこれに補語乃至客語の加つた程度のものを聽取・理解せしめ、兼ねてこれが言表をなし得る素地を養ふことを期したのである。「中」に於ては、更に進んで、簡單な修飾語の加つた程度のもの及び「上」に於て授けなかつた構文形式、簡單な複文等を授け、「下」に於ては「上」及び「中」で授けた構文形式を應用したものを主とし、その發展としてやゝ複雜なものを授けようとしたのである。

一　發音符號

本書は、話言葉を學習せしめるための教科書であるから、發音符號によつて表記することとした。發音符號としては、(一)注音符號を用ひること、(二)萬國音聲符號を用ひること、(三)ローマ字を用ひること、(四)漢字を用ひること、(五)かなを用ひること等が考へられるが、本書の對象とする如き學習者に與へるものとしては、かたかなを發音符號として整理して用ひることを最も適當と認めた。さうして、かたかなを發音符號として用ひるに當つては、(一)が行濁音(二)無聲化母音等をも表記する方法を講ずべきであらうが、本書に於ては、學習上の便宜を考へて簡略に從ひ、これらの表記を省略した。

次に、話言葉の學習を容易ならしめるために、本書に於ては分ち書きの方法を採り、助動詞・助詞を除く各品詞はそれ〴〵他の語から離して書き、助動詞・助詞は上の語に續けて書くこととした。

なほ、かたかなを發音符號として用ひれば、學習者はこれを正字法と

してのかたかなの用法と混同する處がある。この難を避けるため、本書に於ては、印刷の字體に留意し、その區別を明らかならしめた。指導者は、適當な方法により、この區別を明確に學習者に認識せしめることに努める必要がある。

一　教授時數

本書は、約百五十時間を以て教授することを大體の目標としてゐる。しかし、實際の教授に當つては、土地の事情等によつて、この時數に增減を施してもさしつかへない。

日本語教科用

ハナシコトバ學習指導書　上　凡例

一　ハナシコトバは、始めて日本語を學ぶ人々に、日本語を話し聽く手引をしようとして編纂した教科書である。しかも、短期間に、日常生活に必須な挨拶言葉や、極めて簡易な話言葉を修得させようとする教科書である。隨つて、指導の方法が適切でなくては、十分な效果を擧げることができない。本指導書が、編纂趣意とともに學習指導の方法に關する要點を掲げて、實際指導の參考に供しようとする所以である。

われ〳〵の日常の談話は、音聲を主とし、これに指示・身振・表情・動作等を意識的または無意識的に交へて、思想・感情を傳達しあふのであつて、決して音聲のみから成立つてゐるものではない。隨つて、言語學習の初歩に於ては、この眞相に觸れた教材であり、指導の方法でなくては十分な效果を收めることはできない。本書は特にこの點に留意して編

纂し、さういふ立場からの學習指導を立案した。

一　上述の立場から、學習指導の方法は、先づ身邊の事物によつて直接に會得させ、次には、繪畫及び發音符號を用ひて備忘に供し、會得と練習を十分ならしめようとした。

一　本書に示した指導事項は、たゞその骨組に過ぎない。それ〴〵の時間に於ける指導內容として、それに血肉を與へ、それを生きた教材たらしめるために、これを如何に發展させ組織化すればよいかは、一に指導者の工夫に俟たなくてはならない。かくて指導內容が決定すれば、次にそれをどういふ順序に學習させるかといふ指導過程が立てられなくてはならない。

指導過程としては、先づその時間に於て學習させようとする教材と關係の深い既習教材の復習を行ひ、それと關聯せしめて新教材を提示し、更にこれを既習教材に結合して應用を試みさせ、學習を深く確かに

させることが肝要である。

かくて、指導内容を定め、これが指導過程を豫定した上は、更に指導方法を想定して豫定案を立てておく必要がある。この豫定案があつて、始めて學習者のその教材に對する學習活動が指導者に理解せられるのであつて、これなくしては、如何に眞劍な努力を試みても、指導はおろか、學習活動の眞相を握ることさへ不可能である。

指導方法は、指導者または他の學習者の話言葉を聽取らせる聽方、學習者自身に話させる話方及び指導者と學習者とで、または學習者相互で行ふ問答を基本單位とし、これを如何に組合はせるかによつて決定せられる。

(イ) 聽方　外國語修得の出發點は、その外國語の聽方にある。なるべく多く聽かせ、正しく精しく聽取らせることが要諦である。

(ロ) 話方　言葉は、受身になつて聽取するだけでは修得することはでき

ない。自ら進んで話さうといふ能動的な立場に立つて、始めて正しく精しく聽くことができるのである。元來、話すことと聽くこととは相卽した働きであつて、話すことによつて聽く耳があき、聽くことによつて話す口がひらくといふのがその眞相であるから、兩者は相俟つてこれを行ふ機會を與へなくてはならない。

(ハ) 問答　日常の言話生活に於ける會話は、主として聽くことと話すこととから成つてゐるものであるが、問答はこれらとやゝ趣を異にし、特殊な性質を帶びてゐる。先づその特殊性として數へられる第一は、會話が生活的内容的であるのに比して、これは反省的形式的であるといふことである。第二は、會話が全人的であるのに比して、これは專ら知的であるといふことである。隨つて、その方向は、問ふ者と答へる者とが對立的な立場をとり、形式的照應を以て發展するのが一般である。かくて問答は、學習指導法として、聽方・話方によつて得

た言葉につき、その發音・意義の把握を確實にさせ、その應用を自在ならしめる上に大なる效果を齎すものであつて、これが適切を得ると否とは、學習指導の死活を決する鍵であるといつても過言ではない。

なほ指導法としての問答には、日常の會話に比して不自然なところも出て來がちであるが、それは主として內容的な不自然であつて、形式的な不自然ではない。この內容的不自然は、知識の程度と言語運用力とが一致してゐない學習者の言語訓練には、或程度まで不可避である。隨つて、できるだけ日常會話の自然さを失はないといふ注意の下に、言語訓練の本旨を逸しないことが肝要である。

一　日本語を學習させるに當つて特に肝要なのは、指導態度である。われわれが言語を修得するのは一に環境の力によるもので、父兄母姉を始め、周圍の人々の溫かい顧慮の下に、知らず識らずの間にその言語社會の一員となるのであるが、外國語を修得するのはこれと異なり、環境によるかはりに學習的努力により、指導者の指導の下に、練習に練習を重ねてやうやくその用を辨ずるに至るのである。この點に對しては、あたかも母國語修得に於ける父兄母姉の如きいたはりの態度を持し、發音・抑揚の不備を始め、語彙選擇の不適切、語法の不正確等に至るまで、意味の通ずる限りこれを認め、かたことめいた話しぶりによつてその意圖を知り、日本語に對する親しみをもたせるとともに、これが使用の興味と勇氣とを喚起することに努め、日本語で話さうとする意欲の涵養と態度の育成に努めなくてはならない。指導者が發音・語法の正確または用語・構文の的確を期するあまり、最初から批正を嚴密に行ふ時は、學習者は興味と勇氣を失ひ、日本語學習の意欲さへ失ふに至るであらう。入門に當つては、細瑕を厭はず、その大成を將來に期することが指導上肝要である。

かくの如くして、日本語學習の興味を喚起し、大膽・自由に會話しよう

とする傾向を養ひ、やがて學習の進むに從ひ、用語・構文・發音・語法の批正に着手し、次第に會話の上達を期せなくてはならない。この兩樣の態度のいづれを缺いても、またその適用に機宜を失つても、有效な日本語の學習指導は期し難いであらう。

一　本書は、學習指導の方法を、時間を單位として計畫せず、教材を單位として立案した。これは、學習の時・所・位に適切な指導たらしめるために、繁簡伸縮を圖る便に供しようとしたためにほかならない。

一　本書の組織は、敍上の趣旨に基づき、各課に關して教材・指導・備考の三項を設け、指導に於ては學習指導の要領と方法を示し、備考に於ては發音上及び指導上の注意を記すこととした。

一　第一課から第十課までは、日本語學習の入門者に對する最初の指導である。まだ一語も日本語を解しない人々を相手として、日本語の初歩を學習させようとするのであるから、指導者と學習者とが意志を通じあふ方法は、指示・身振・表情・動作等の如き身體的表現のほかにはないといふ豫想の下に着手しなくてはならない。この身體的表現を手がかりとして、話言葉を、しかも必須で簡易な日本語を聽く力と話す素地を得させるために課する第一階梯である。

一　第十一課以下の教材は、かたかなを發音符號として用ひてゐるが、これは第十課までに於ける事物や繪畫と同樣、一種の教便物で、特に語彙・構文の備忘として練習に供へるためである。これが實際の指導に當つては、できるだけ眼前の事實から出發することに努め、發音符號としてのかたかなは備忘的に使用するに止むべきである。

一　第一課から第十課までは、事物・繪畫のみを用ひて聽方の學習をさせることを主眼とし、第十一課以下は、これを基礎として發音符號としてのかたかなを併せ用ひて、話方の學習まで進むこととした。本書に掲げてある問答には、教科書に於けると同じく、日常會話に於ける表現形

式と多少ちがつてゐるものもあるけれども、これは全く言語訓練の必要から設けた段階である。

一　本書の各課に記した指導案は、各教材による話言葉の學習には、少くもこれだけは必要であると思はれる問答を計畫的に掲げたものである。隨つて、實際の指導に當つては、その學習者の力に應じ、その場所に應じ、その時に應じて問答を加除して適切を期することが肝要である。

一　各課の指導案に示したもののほか、必要に應じて毎時使用すべき教室作法と教室用語とを左に摘記する。

(イ)　教室作法

○挨　拶

指導者と學習者とが顏を合はせた時、指導者は、先づ

おはやう。（「こんばんは。」または「こんにちは。」）

といふ。學習者は、初の間はたゞ聽いてゐるだけでよいけれど

も、なるべく早い時期に、學習者にも、同時に

おはやう。（おはやうございます。）

といはせる。但し、毎日第一時限に行ふ挨拶で、第二時限以下では、たゞ默禮だけでよい。

○點　呼

しゆっせきを　とります。

といつて、名簿によつて、名簿がなければ他に適當な方法によつて、學習者の一人々々を

□さん。

と呼び、それ〴〵

はい。

と答へさせる。但し、最初の時間には、たゞうなづくだけでもよい。これまた、なるべく早い時期に於て、

はい。

といはせる。或は指導者の自問自答でそこへ導くのもよい。いづれにしても、名を呼び、それに答へることは、相互の親愛を深める。毎時限の初に行ふことはいふまでもないが、教室以外でもなるべく早く名を覺えて呼ぶことは、指導上大切な用意である。

（課　業）

○挨　拶

手振とともに、

おたちなさい。

といひ、全員を起立させ、

さやうなら。

といひ、頭を下げさせた後に退散させる。だん〴〵學習者が「さやうなら。」といへるやうにするのは、もとより望ましい。

注意　挨拶は、教室以外でも機會ある毎に行ひ、自然に學習者の方からこれを行ふやうに導くことが大切である。

（ロ）教室用語

教室に於ける學習指導の實際に當つて、その時、その場合の必要に應じ、必要な言葉を提示することは、自然に且容易に理解・修得させる最良の方法である。例へば、

わかりますか。
わかりましたか。
わかりませんか。
よろしい。
ちがひます。
よく　できました。
ちょっと　おまちなさい。
しつもんが　ありますか。
○○ページを　おあけなさい。
そこまで。
だれか　いへますか。
これは　にっぽんごで　なんと　いひますか。

にっぽんごで　いってごらんなさい。
たってはいけません。
さわいではいけません。
わきみを　してはいけません。
ちこくしてはいけません。
かねが　なりました。
けふは　これまで。
よく　おきゝなさい。
もう　いちど　いひますよ。
さあ、いっしょに　いひませう。
みんな　いっしょに。
□さん、いってごらんなさい。
さうです。よく　できました。
せんせいが　さきに　いってみませう。
せんせいの　くちもとを　ごらんなさい。
せんせいの　まねを　なさい。
そのつぎ。

ひとりづつ　いってごらんなさい。
……の　はうが　よろしい。
……てしまひます。
……てあげます。
……てやります。
……てくださいます。
……てくれます。
……と　みえます。
……ても　よろしい。
……ことが　あります。
……ことに　します。
……ことに　なります。

の如きは、教室作業の中に織りこんで、自由に頻繁に用ひ、歸納的に會得させるのが有效な方法である。

母音口形圖解說

發音の指導法

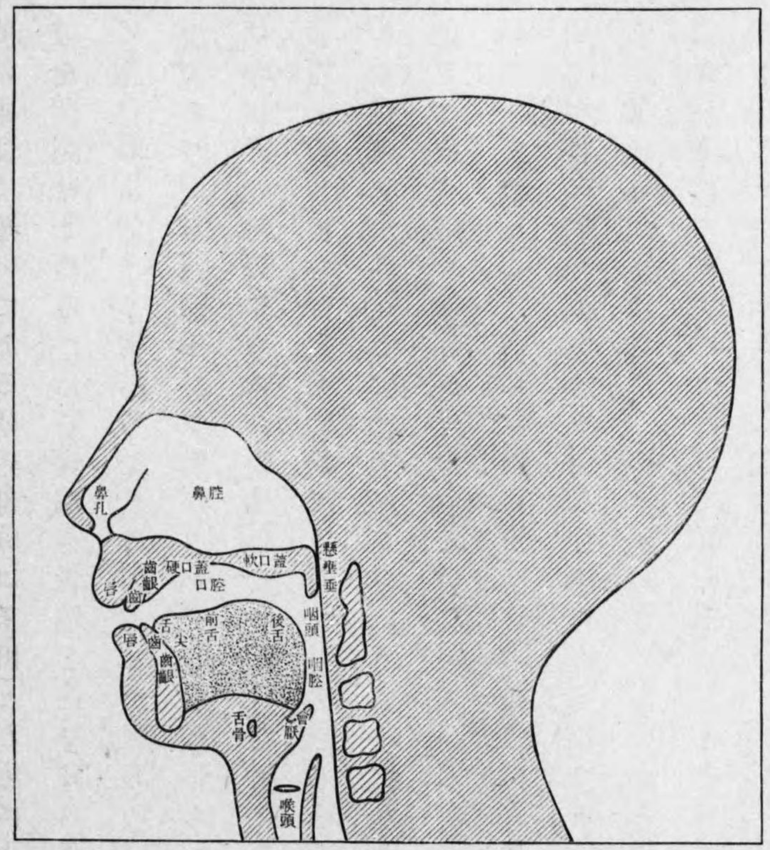
發音訓練の第一段階は、學習者に正しく聽かせることである。それには、先づ練習すべき音を正しく聽くとともに、自己の發音する音の正否を聽きわける耳を養ふ必要がある。音を正しく且意識的に聽く訓練を受けてゐない學習者には、教師の範例も比較的效果が薄いものである。正しい範例のみを聽けば無意識に覺えるといふことは、年齢の低い幼兒の場合で、母國語以外の音の訓練には、大抵の場合意識的練習を必要とする。

正しい發音は初期に於て修得しなければならない。誤つた發音癖は、一旦固定してしまふと、なか〳〵矯正し難いものであるから、その固定に先立つて矯正しなければならない。その矯正の時期竝びに程度は教授者の苦心を要するところで、矯正が過ぎたのは不足の場合と同じく學習

效果を殺ぐものである。教授者は常に此の點に留意し、學習者の誤つた發音を聽けば隨時これが矯正をなすとともに、學習者の誤り易い點に豫め備へて、適當な發音指導を行はなければならない。あらゆる發音指導を通じて正しい範例を示すことが、最も大切であることはいふまでもないが、時として、發音條件の說明、母國語の近似音との比較なども極めて有效である。但し、音聲學的說明は、それが發音指導または矯正に有效な場合に限つて用ひ、徒らに術語などを用ひて却つて學習者を混亂せしめる如きは、固く戒めなければならない。

發音器管

發音器官中、上下の唇は、丸くしたり突出したりして調音を助け、更に音色構成の助けをもする。齒は唇と共同して特殊の摩擦音を出す作用をするが、それに用ひられるのは、主として門齒である。齒齦の中、上齒の齒齦の兩側は、舌の兩側面と接觸して調音を助けることもあるが、主として



用ひられるのは、上下兩顎の門齒の齒齦である。硬口蓋は、口腔の天井の硬い部分で、かなり曲つてゐる。軟口蓋は、硬口蓋に續く奥の方の軟い天井で、自由に上り下りする。懸壅垂は、俗にいふ「のどひこ」で、軟口蓋の尖端をなし、舌の後方に向かつて垂れてゐる。この懸壅垂は、

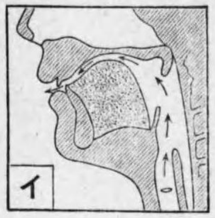
その兩側に續いてゐる軟い部分(口蓋帆)とともに上下に動いて、鼻腔への道を開閉せしめる。舌の尖端を舌端といひ、硬口蓋と相對する部分を前舌、軟口蓋に對するものを後舌といふ。懸壅垂の後方から喉頭部に至る垂直の空洞を咽腔といひ、その上部を咽頭といふ。この咽喉内にあつて、舌の根元の部分から上方に向かつて反り上つてゐる蓋がある。これを會厭(えん)といひ、その付根が舌骨によつて包まれてをり、自由自在に反り上つたり垂れ下つたりする。垂れ下る時は、氣管に通ずる道を閉ぢて咽喉と食道とを連絡し、反り上つた時は、食道の口が塞がつて咽腔と氣管とを連絡する。喉頭の内部には聲帶がある。聲帶は二條あつて、喉頭の内壁に對して、ほゞ直角に左右から扉のやうに突出してゐる。呼氣が聲門卽ちこの兩聲帶の間を通過する時、聲門が開いたまゝで聲帶が振動しなければ、「いき」の音卽ち無聲音となり、聲帶の振動を伴なへば「こゑ」の音卽ち有聲音となる。鼻腔は口蓋の眞上にある空洞で、〔m〕〔n〕〔ng〕の如きいはゆる鼻音

を發する共鳴域である。しかし、これはたゞ受動的に動くだけで、意識的に働かせることはできない。この點が口腔內部の共鳴域と全く趣を異にしてゐる。口腔內では、自由自在に形を變じ得る舌や、唇・下顎の運動などによつて、その內部の形態が種々に變化すると同時に、聲帶から來る「こゑ」や喉頭部から出る「いき」をいろ〳〵に調節して各種の音を出すのである。

母音

語の音には母音と子音とがある。母音は、聲帶の振動によつて發せられた音聲が口腔を通過する時、多少その通路を狹められるだけで、舌・唇などの運動により、いろ〳〵な障碍を受けず、比較的自由に流出する音をいひ、子音は、舌や唇の運動によつて氣息を破裂させたり、摩擦させたり、閉塞させたりして、その流出に種々の障碍・調節を與へる音で、その時聲帶の振動を伴なふか否かによつて「いき」の音と「こゑ」の音とに分れることは前述

の如くである。聲帶の振動は、外部からも感ぜられるから、學習者に指先を咽喉にあてさせて「いき」の音「こゑ」の音を出させ、聲帶の振動の有無を知らしめることができる。



母音は、大別すれば前母音と後母音とになる。前母音は、前舌部が硬口蓋に向かつて高まつて發せられるもので、日本語では**イ**と**エ**である。後母音は、後舌部が軟口蓋に向かつて隆起して發せられる母音で、日本語では**オ・ウ**である。**ア**はほぼ中間的位置で發せられる。

イ

一、**イ**の發音條件

1　前舌部が硬口蓋に向かつて高まり、硬口蓋と前舌との間の氣息の通路が一體に狹くなる。しかし、あまり狹くなると、氣息の摩擦を生じて母音の性質を失ふことになる。隨つて、舌の位置

は、母音の性質を失はない限りに於て最高となり、自然に舌の筋肉は緊張する。

2　聲帶を振動させて「こゑ」を出す。

3　兩唇は丸くしないで、やゝ平に開く。

4　軟口蓋は上つて、鼻腔に通ずる氣息の通路を閉鎖して鼻音化することをふせぐ。

二、イの正しい發音指導法

正しいイの音を聽きなれさせるとともに、口構へを圖のやうにさせ、唇を丸くしないで「こゑ」を出して發音させる。

エ

一、エの發音條件

1　前舌部が硬口蓋に向かつて高まるが、イの場合よりも低く、舌の最高部はイの場合よりも少し後方にある。舌の筋肉は少し緊張するが、イの場合ほどではない。

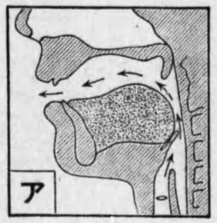
2　聲帶を振動させて「こゑ」を出す。

3　兩唇・兩顎ともにイの場合より大きく開き、唇も丸くしない。

4　鼻腔に通ずる氣息の通路は閉鎖される。

二、エの正しい發音指導法

正しいエの音を聽きなれさせるとともに、口構へを圖のやうにさせ、唇を丸くしないで「こゑ」を出して發音させる。



ア

一、アの發音條件

1　唇を丸くしないで口を大きく開く。舌は中央部がやゝ高くなるが、全體としては最も低くする。舌の筋肉は緊張しない。

2　聲帶を振動させて「こゑ」を出す。

3　兩唇と兩顎の開きは、ともに他の母音に比べて最も大きい。

4　鼻腔に通ずる氣息の通路は閉鎖される。

オ

二、アの正しい發音指導法

正しいアの音を聽きなれさせるとともに、口構へを圖のやうにさせ、唇を丸くしないで發音させる。

一、オの發音條件

1　口をやゝ大きく開く。舌は、後舌部が軟口蓋の方に向かつてアの時よりも高まる。舌の筋肉はあまり緊張しない。

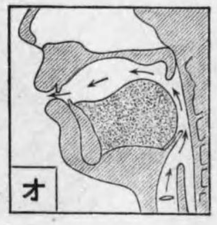
2　聲帶を振動させて「こゑ」を出す。

3　唇は、やゝ突出し氣味にして、少し丸味をもたせる。

4　鼻腔に通ずる氣息の通路は閉鎖される。

二、オの正しい發音指導法

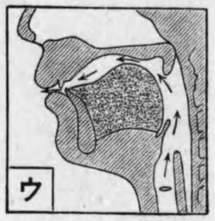
正しいオの音を聽きなれさせるとともに、口構へを圖のやうにさせ、兩唇を少し突出し、且丸め氣味にして發音させる。アが兩唇を大きく平に開くのに反し、オは開きを少くして丸め氣味にする。



ウ

一、ウの發音條件

1　口をあまり開かないで、後舌部を軟口蓋に向けてオの場合よりも高くし、また軟口蓋と後舌との間の氣息の通路を狹くする。オの場合よりも舌の筋肉は緊張する。



2　聲帶を振動させて「こゑ」を出す。

3　兩唇の開きは、母音中最も小さくし、且丸くしない。

4　鼻腔に通ずる氣息の通路は閉鎖される。

二、ウの正しい發音指導法

正しいウの音を聽きなれさせるとともに、口構へを圖のやうにして發音させる。類似の外國音の中には、あたかも口笛を吹く時のやうに兩唇を突出すものがあるが、日本語のウはこれと異なり、兩唇を突出さないことが肝要である。

附　アクセント

本指導書の教材欄に、各教材のアクセントを附けた。その要領は次のとほりである。

(一)　アクセントとは、聲の高低・調子が各單語に慣用上固定したものをい

ふ。

(二) **ホンデス　アナタ**　の如く右側に縦線を引いたものは、その部分の聲の調子が高くなることを示す。

(三) 縦線を附けない語は、語の終まで大體同じ調子で發音することを示す。

(四) **ソーデワアリマセン**　の如く括弧を附けたのは、特にその語の意味を強めていふ時のほかは、聲の調子があまり高くならないことを示す。

(五) 同一の單語について二樣のアクセントの慣用のあるものは、その一を表記し、他を參考として備考欄に掲げた。

第一課　（第四頁）

一　教材

ホン（コレハ　ホンデス。）**カミ**（コレハ　カミデス。）

ハコ（コレハ　ハコデス。）

メ・ハナ・クチ・ミミ・テ・アシ・アタマ。（各同前）

〔教具〕本・紙・箱等。

二　指導

(一)　要領

1　本課に於ては、「ほん」「かみ」「はこ」等のやうな學習者の身近にある事物や「め」「はな」「くち」「みゝ」「て」「あし」「あたま」等のやうな身體各部の名稱を確實に把握させるのが主眼である。

2　指導者は、先づ事物を指し示しながら、「これは○○です。」と何遍も繰返していひ、更に、その事物の名稱を繰返して學習者に聽かせ、聽方を十分にさせることによつて、事物と名稱との觀念聯合を圖る。

3　聽方が十分に行はれた後、指導者のいふのを聽いて、學習者も一齊にいふ。いはゆる聽方・話方を行ふ。但し、この際に於ける指導者は、學習者にいはせることにあまり性急であつてはならない。十分聽取つてゐない者に早くいはせると、誤つた發表習慣がつき、學習者を常に不安な狀態におくから、却つて話方に對する熱意と自信とを失はせる。指導者は、學習者の反應に注意し、指導者が事物を示しながら、「これは――」といつて一瞬時躊躇すると、學習者が思はず、「ほんです。」といつて補足したいやうな衝動を示す時期をみていはせるといふやうにしなくてはならない。殊に繪畫教材の段階に於ては、話言葉の正しい習慣法たる耳より口への習慣を養成する準備行爲であるから、話方學習に於ても、先づ指導者がいひ、その聽覺像が學習者の腦裡から消去らぬ中にいはせるやうにしなくてはならない。

4　なほ、この事物の名稱を聽かせるに當つては、指導者は、常に「これは○○です。」といふ構文を伴なはせ、單語でなくて文的語として印象させることを忘れてはならない。

(二)　聽　方

（○指導者が話し、△學習者は聽く。）

○本を高く揭げ示しながら、先づ

これは　ほんです。

と何遍も繰返していひ、更に、「ほん」「ほん」と反復していふ。

注意　種々の本を用意し、厚い本、薄い本、大形の本、小形の本等を代る代る示して學習の單調を破り、修得を確實にする。

○紙を高く揭げ示しながら、先づ

これは　かみです。

と何遍も繰返していひ、更に、「かみ」「かみ」と反復していふ。

注意　同前。

○箱を高く揭げ示しながら、先づ

これは　はこです。

と何遍も繰返していひ、更に、「はこ」「はこ」と反復していふ。

注意　同前。

以上數回反復。

○次に、箇々の事物を指しながら、

これは　ほんです。

これは　かみです。

これは　はこです。

と順次にいひ、更に事物を順次に手早く指しながら、

ほん。

かみ。

はこ。

の如くいひ、發音を確かに聽かせるとともに、事物とその名稱との觀念聯合を圖る。

以上數回反復。

(三)　聽方・話方

（○指導者のいふのを聽いて、△學習者も一齊にいふ。この際も、指導者はともにいふことを忘れてはならない。）

○ほん。（本を高く揭げ示しながら）

△ほん。（指導者も和して一齊に）

○かみ。（紙を高く掲げ示しながら）
△かみ。（指導者も和して一齊に）
○はこ。（箱を高く掲げ示しながら）
△はこ。（指導者も和して一齊に）
以上數回反復。

三　補　材

メ・ハナ・クチ・ミミ・アタマ・テ・アシ。

四　指　導

(一)　聽　方

○自分の眼を指して、先づ
これは　めです。
と何遍も繰返していひ、更に、「め」「め」と反復していふ。
○自分の鼻を指して、先づ
これは　はなです。
と何遍も繰返していひ、更に、「はな」「はな」と反復していふ。
○自分の口を指して、先づ
これは　くちです。
と何遍も繰返していひ、更に、「くち」「くち」と反復していふ。
○自分の耳を指して、先づ
これは　みゝです。
と何遍も繰返していひ、更に、「みゝ」「みゝ」と反復していふ。
○自分の頭を指して、先づ
これは　あたまです。
と何遍も繰返していひ、更に、「あたま」「あたま」と反復していふ。
○自分の手を高く揭げて、先づ
これは　てです。

と何遍も繰返していひ、更に、「て」「て」と反復していふ。
○自分の足を指して、先づ
これは　あしです。
と何遍も繰返していひ、更に、「あし」「あし」と反復していふ。
以上數回反復。
○次に身體の各部分を指しながら、
これは　めです。
これは　はなです。
これは　くちです。
これは　みゝです。
これは　あたまです。
これは　てです。
これは　あしです。
と順次にいひ、更に各部分を順次に手早く指しながら、
め。
はな。
くち。
……。
の如くいひ、必要に應じ、順序をかへて提示する。
以上數回反復。

(二)　聽方・話方

○め。（眼を指して）
△め。（指導者も和して一齊に）
○はな。（鼻を指して）
△はな。（指導者も和して一齊に）
○くち。（口を指して）
△くち。（指導者も和して一齊に）
○みゝ。（耳を指して）
△みゝ。（指導者も和して一齊に）

○あたま。（頭を指して）
△あたま。（指導者も和して一齊に）
○て。（手を掲げて）
△て。（指導者も和して一齊に）
○あし。（足を指して）
△あし。（指導者も和して一齊に）
以上數回反復。

五　備考

(一) ホンのホは、支那語の場合のやうに喉の奥の方から出し易いから、さうならぬやうに注意することが必要である。
(二) デとテの區別をはつきり聽きわけられるやうにいふ。
(三) カミはそのアクセントにより、紙と神（カミ）または（カミ）上（カミ）等の別が生ずる。
(四) ハナはそのアクセントにより、鼻と花（ハナ）發端（ハナ）等となるから、注意する必要がある。
(五) アタマのタがダになり易い。タとダの區別をはつきりさせること。
(六) クチのチがジになり易い。チとジの區別をはつきりさせること。
(七) 補材は時間の關係で省いてもよく、第二時の復習に用ひてもよい。

第二課（第四頁）

一　教材

イス　ツクエ　コシカケ

（教具）椅子・机・腰掛・箱等。（教室内にない時は、掛圖または適當な繪畫を用ひる。）

二　指導

(一) 要領

1　本課に於ては、第一課に於て學習した「これは〇〇です。」の構文の發展として、「それは〇〇です。」といふ構文を學習させ、「いす」「つくゑ」「こしかけ」等の名稱を會得させるのが主眼である。

2　本課の學習に當つて、先づ前課の「ほん」「かみ」「はこ」等の事物の名稱や、「め」「はな」「くち」「みゝ」「あたま」「て」「あし」等の身體各部の名稱を復習して、既習教材を練習させるとともに、會話氣分を惹起させる。

3　「いす」「つくゑ」「こしかけ」等の實物を用意しておいて、指導者はその事物を指し示

しながら、「これは○○です。」と何回も繰返していひ、學習者に十分に聽入らせる。なほ、この際、實物がなければ繪畫を用ひるほかはないが、この場合、「これは○○のゑです。」といふべきであるが、こゝではそれほど嚴密にいふ必要はない。

4　聽方が十分になつて、學習者の口から、自ら「いす」「つくゑ」「こしかけ」等の言葉が流れ出るやうになるのを待つて、指導者は、先づ「これは○○です。」といひ、學習者にも和していはせる。また、他の事物をも交互にいはせて、修得を確實にする。なほ、この段階に於ては、指導者は模範を示し、學習者に一人々々いはせるやうにする。

5　「これは○○です。」の構文で、「いす」「つくゑ」「こしかけ」等の名稱が會得されたら、それらの事物を學習者に近い場所に移し、指導者は離れた所に立つて、「それは○○です。」の「それは」の意味を直接に會得させる。なほ、「これは○○です。」と交互に使用させて、その理解を深める。

(二)　復　習

○これは　ほんです。
○これは　かみです。
○これは　はこです。
○これは　めです。
○これは　はなです。
○その他。

次に、本を揭げて「ほん」といひ、學習者に「ほん」といはせる。順次に「かみ」「はこ」「め」「はな」等をいはせる。

(三)　聽　方

○これは　ほんです。（本を揭げて）
○これは　いすです。（椅子を指して、または繪畫を用ひて）
○これは　つくゑです。（机を指して、または繪畫を用ひて）
○これは　こしかけです。（學習者に近づき、その腰掛を指して）

以上數回反復。

(四)　聽方・話方

○これは　はこです。（箱を揭げて）
△これは　はこです。（指導者も和して一齊に）
○これは　かみです。（紙を揭げて）
△これは　かみです。（指導者も和して一齊に）
○これは　いすです。（椅子に手を觸れて）
△これは　いすです。（指導者も和して一齊に）
○これは　つくゑです。（机に手を觸れて）
△これは　つくゑです。（指導者も和して一齊に）
○これは　こしかけです。（學習者に近づき、その腰掛を指して）
△これは　こしかけです。（指導者も和して一齊に）

以上數回反復。（但し、時間があるなら、指導者が一回いひ、學習者は一齊に、または一人々々に、指導者の模範に從つていふ。）

(五)　聽　方

○これは　つくゑです。（身近な机に手を觸れながら）

○それは　いすです。（やゝ離れてゐる椅子を指して）
○これは　ほんです。（本を高く揭げて）
○それは　こしかけです。（學習者の掛けてゐる腰掛を教壇上から指して）
○これは　こしかけです。（學習者の所に行き、腰掛に手を觸れながら）
○それは　ほんです。（教壇上の本を指して）
○その他。
以上數回反復。

(六)

聽方・話方

○それは　ほんです。（學習者の側に立ち、教壇上の本を指して）
△それは　ほんです。（指導者も和して一齊に）
○それは　つくゑです。（學習者の側に立ち、教壇上の机を指して）
△それは　つくゑです。（指導者も和して一齊に）
○それは　こしかけです。（或學習者の近くに立ち、少し離れた學習者の腰掛を指して）
△それは　こしかけです。（指導者も和して一齊に）
以上數回反復。（但し、なほ時間があるなら、學習者だけで一齊に、または一人々々に、指導者の模範につれていはせる。）

三　備考

ホンのホ、デスのデが誤られ易い。またカミ・ハナのアクセントに注意して、カミ（上）ハナ（發端）にならぬやうに指導することが大切である。

第三課（第五頁）

一　教材

コレ／ソレ〕ワ　〇〇デスカ。
ハイ、ソーデス。
イーエ、ソーデワアリマセン。

〔教具〕本・紙・机・椅子・腰掛等。

二　指導

(一)　要領

1　本課に於ては、本・紙・机・椅子・腰掛等の既習教材を材料として「これは〇〇ですか。」「それは〇〇ですか。」等の疑問と、更にそれに對する答としての「はい、さうです。」と「いゝえ、さうではありません。」の二つの肯定と否定とを聽いて理解させるのが主眼である。

2　先づ前課の「いす」「つくゑ」「こしかけ」等の語彙を、「これは〇〇です。」「それは〇〇です。」の構文で一人々々にいはせ、復習を十分にする。

3　次に聽方に入り、その事物を指し示しながら、指導者は「これは〇〇ですか。」また は、「それは〇〇ですか。」と自問し、首を上下に動かして頷きながら、「はい、さうです。」と自答する。かくて、この問答が會得できたら、その名稱と異なる事物を指しながら、「これは〇〇ですか。」または「それは〇〇ですか。」の自問に對して、首を左右に振りながら、「いゝえ、さうではありません。」と自答する。

4　聽方が十分になつたら、次に聽方話方に入る。即ち、指導者がその事物を指して、「これは〇〇ですか。」または「それは〇〇ですか。」と問ひ、學習者全體及び指導者も和して一齊に、「はい、さうです。」と答へる。これができるやうになつてから、指導者はその名稱と相違する事物を指し示しながら、「これは〇〇ですか。」または「それは〇〇ですか。」と問ひ、指導者も和して學習者と一齊に、「いゝえ、さうではありません。」と答へる。これを第一課及び第二課に於て學習した語彙によつて練習する。

なほ、「はい、さうです。」と「いゝえ、さうではありません。」とは、會話に於ける基本的な言葉であるから、學習者の一人々々に十分に理解させ、練習させることが肝要である。

(二)　復習

〇これは　いすです。（椅子に手を觸れながら）
〇これは　つくゑです。（机に手を觸れながら）
〇それは　こしかけです。（學習者の腰掛

を指して)
○それは　いすです。(學習者の席を指して)
○その他。
○これは　つくゑです。(學習者の席へ行き、その机に手を觸れながら)
△これは　つくゑです。(一人々々に)
○それは　いすです。(學習者の席から教壇上の椅子を指して)
△それは　いすです。(一人々々に)
△○その他。

(三)　聽　方

○これは　ほんですか。(本を高く揭げて示しながら自問して)
はい、さうです。(首を上下に動かして頷きながら自答する。)
○これは　かみですか。(紙を高く揭げて示しながら自問して)
はい、さうです。(首を上下に動かして頷きながら自答する。)
○これは　ほんですか。(その紙を揭げたまゝで自問して)
いゝえ、さうではありません。(首を左右に振りながら自答する。)
○これは　つくゑですか。(机を指して)
はい、さうです。(頷きながら)
○これは　いすですか。(机を指したまゝ)
いゝえ、さうではありません。(首を左右に振りながら)
○それは　こしかけですか。(教壇から學習者の腰掛を指して)
はい、さうです。(頷きながら)
○それは　つくゑですか。(腰掛を指したまゝ)
いゝえ、さうではありません。(首を左右に振りながら)
○その他。

(四)　聽方・話方

○これは　めですか。(自分の眼を指して)
△はい、さうです。(指導者も和して一齊に)
○これは　はなですか。(自分の鼻を指して)
△はい、さうです。(指導者も和して一齊に)
○これは　くちですか。(自分の口を指して)
△はい、さうです。(指導者も和して一齊に)
△○その他。
○それは　ほんですか。(少し離れた所にある本を指して)
△はい、さうです。
(指導者は「はい」で和することを止め、他は學習者だけにいはせる。)
○それは　つくゑですか。(机を指して)
△はい、さうです。(一齊に)
△○その他。

注意　「はい、さうです。」は、「です」で終る可否の問に對する答として廣く行はれてゐて、その應用範圍が極めて廣く、教室でも有效な言葉であるから、必ず修得させなくてはならない教材であるが、發音が不完全だと相手に不快の感を與へる恐れがある。

故に聽方の機會を十分與へてから、最も自然な發音ができるやうに指導する必要がある。

○これは　みゝですか。（自分の眼を指して）

△いゝえ、さうではありません。（指導者も和して一齊に）

○これは　あたまですか。（自分の鼻を指して）

△いゝえ、さうではありません。（指導者も和して一齊に）

△○その他。

○それは　いすですか。（教壇から學習者の机を指して）

△いゝえ、さうではありません。（指導者は「いゝえ」で和することを止め、他は學習者だけにいはせる。）

○これは　こしかけですか。（椅子を指して）

△いゝえ、さうではありません。（學習者だけにいはせる。）

△○その他。

○これは　めですか。（自分の眼を指して）

△はい、さうです。（一人々々に）

○これは　はなですか。（自分の眼を指したまゝ）

△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）

△○その他。

注意　いひ方が多少不完全であつても、あまり矯正し過ぎてはならない。なほ、「では」は、親しい人々の間の口語では「ぢゃ」と發音される場合も多い。

三　備考

ソーデスが、ソデスにイーエがイエになり易い。發音練習としてはできても、實際の話では誤りがちであるから、注意して聽かせる。

第四課（第五頁）

一　教材

アレ　ナン　マド　カベ　コクバン

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　本課に於ては、「あれ」「なん」「まど」「かべ」「こくばん」等の語彙の學習と、更に前課に於ける肯定的な答を豫期する質問と、否定的な答を豫期する質問とに併せて、一般的疑問とそれに對する答とを授けるのが主眼である。

2　前課の、「これは○○ですか。」「それは○○ですか。」に對する「はい、さうです。」「いゝえ、さうではありません。」を十分に復習する。この際、指導者が、「これは○○ですか。」に對する答が、「はい、さうです。」にしても、「いゝえ、さうではありません。」にしても、指導者も學習者に和して一齊にいふべきであるが、前半は一齊に答へ、後半は學習者のみによつて答へるといふやうにすることが肝要である。

3　次に聽方に於ては、指導者がその事物に觸れて、「これは○○です。」といひ、また學習者に近い事物を指して、「それは○○です。」といひ、また指導者からも學習者からも離れた事物を指して、「あれは○○です。」といつて、「これ（それ、あれ）は○○です。」といふ形を學習させる。次に、「これ（それ、あれ）は○○ですか。」といふ疑問に對して、「はい、さうです。」といふ肯定的な答を必要とするやうな問答をし、更にこの疑問に對して、「いゝえ、さうではありません。」といふ否定的な答を必要とするやうな問答をする。但し、この段階に於ては、指導者の自問自答であつて、學習者には、たゞよく聽入らせるといふやうでありたい。

4　次に聽方、話方の段階に於ては、「これ（それ）は○○ですか。」の疑問に對して、先づ肯定的な答を求めるやうにし、次に否定的な答を求むべきである。勿論、指導者は、事物を指し示しながら發問し、學習者は、一人一人、または一齊に、或は肯定的な答を、或は否定的な答をするやうにし向けるべきである。なほ、右の學習が十分できるやうになつて、「これ（それ、あれ）は○○ですか。」といふ一般的疑問で發問し、「これは○○です。」または、「○○です。」といふやうに、一般的な答をさせるやうな訓練をする。

(二)　復習

(三)　聽方

○これは　こしかけです。（學習者の腰掛に手を觸れながら）

○それは　つくゑです。（少し離れた机を

指して)

○あれは　いすです。(指導者からも學習者からも離れた椅子を指して)

○あれは　こくばんです。(學習者の席に立ち、黒板を指して)

○これは　こくばんです。(黒板に近く立つて)

○それは　つくゑです。(教壇から學習者の机を指して)

○あれは　まどです。(指導者からも學習者からも離れた窓を指して)

○これは　まどですか。(窓に手を觸れながら自問して)

はい、さうです。(自答する)

○これは　つくゑですか。(窓に手を觸れたまゝ)

いゝえ、さうではありません。(自答する。)

○あれは　こくばんですか。(學習者の席から黒板を指して)

はい、さうです。(自答する。)

○あれは　まどですか。(黒板を指して)

いゝえ、さうではありません。(自答する。)

○あれは　なんですか。(黒板を指して)

あれは　こくばんです。(自答する。)

○あれは　まどですか。(窓を指して)

はい、さうです。(自答する。)

○あれは　こくばんですか。(窓を指して)

いゝえ、さうではありません。(自答する。)

○あれは　なんですか。(窓を指して)

あれは　まどです。(自答する。)

○その他。

(四)　聽方・話方

○これは　ほんですか。(本を揭げて)

△はい、さうです。(一齊に、また一人々々に)

○これは　かみですか。(本を揭げながら)

△いゝえ、さうではありません。(一齊に、また一人々々に)

○これは　なんですか。(本を揭げて)

△それは　ほんです。(一齊に、また一人一人に)

○それは　こしかけですか。(腰掛を指して)

△はい、さうです。(一齊に、また一人々々に)

○それは　つくゑですか。(腰掛を指して)

△いゝえ、さうではありません。(一齊に、また一人々々に)

○それは　なんですか。(腰掛を指して)

△それは　こしかけです。(一齊に、また一人一人に)

注意　「これ(それ・あれ)はなんですか。」に對する答の時には、「それ(これ・あれ)は○○です。」と答へずに、「これ(それ・あれ)は」等を省略する方が普通である。

かくして、(1)肯定的な答を豫期する質問、(2)否定的な答を豫期する質問、(3)一般的疑問といふ順序に發問して、十分反復した後、

○これは　なんですか。(手を指して)

△(それは)　てです。(一人々々に)

○これは　なんですか。(足を指して)

△　あしです。(一人々々に)

○これは　なんですか。（椅子に觸れて）
△　いすです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（自分の頭を指して）
△　あたまです。（一人々々に）

の如く發問して、既習の言葉に對する話方の練習をして授業を終る。

三　備　考

(一) マドのドを敎へる時に、ト音を聽かせて、清濁兩音を聽分けることを練習させる。
(二) ベ・バのやうな濁音をよく練習させる。
(三) アレといふやうに、アの音が最初に來た時には、あまり口をあけ過ぎないやうに注意する。一般にあけ過ぎる傾向があるから。

第五課（第五頁）

一　教　材

ワタクシ　アナタ　センセー
アノカタ　ドナタ　セート　コノカタ
ワタクシ
アナタ　ワ　□　デス。

〔教具〕

二　指　導

(一)　要　領

1　本課に於ては、第一課から第四課までに於て學習した構文を基礎として、「わたくし」「あなた」「せんせい」「せいと」「このかた」「あのかた」「どなた」及び人の姓等の、對人關係に於ける最も基本的な語彙を學習させるのが主眼である。

2　復習は前課の方法に準じてする。

3　聽方に於ては、「わたくし／あなた」は○○です。」といふ構文を最初に聽かせ、次に、「わたくしは／せんせいです。」「あなたは／せいとです。」等の「せんせい」「せいと」を學習させ、右の學習を根基として、「わたくし／あなた」は□です

か。」の肯定的な答を豫期する質問や、否定的な答を豫期する質問をして「はい、さうです。」「いゝえ、さうではありません。」等の肯定的な答及び否定的な答を求める。

これは、自問自答の形に於て、指導者は極めて身振を巧みに使つて、靜かに學習者に聽入らせることが肝要である。なほ、「このかた（あのかた）」は□さんですか。」及びそれに對する答、「このかた（あのかた）」は□さんです。」や、「はい、さうです。」「いゝえ、さうではありません。」等が話され、次いで、「このかた（あのかた）」はどなたですか。」の形も授けられなければならない。

4　聽方話方に於ては、上記の聽方を十分に行つた後、指導者は、「わたくし（あなた）」は□ですか。」と發問して「はい、さうです。」「いゝえ、さうではありません。」を學習者に答へさせ、次いで、「このかた（あなた）」はどなたですか。」「わたくしは、「せんせい（せいと）」ですか。」「□さんは、「せんせい（せいと）」ですか。」等の形に於て發問し、これに對して肯定的な答及び否定的な答を要求し、更に一般的な答をもさせる。但し、本課の學習は相當に材料が豐富になつてゐるので、問答の上にかなり技巧を要すると思ふ。指導者の問に對して、學習者は一齊に、或は一人々々に、丁寧に答へさせるやうにして、この基本的な問答を十分に會得させなければならない。

(二)　復　習

(三)　聽　方

○わたくしは□（自分の姓）です。（指導者は、自分を指しながら明瞭にいふ。）

○あなたは□（學習者の姓）さんです。（學習者の一人を指して）

○あなたは□（他の學習者の姓）さんです。（その學習者を指して）

○その他。

○わたくしは　せんせいです。（自分を指して）

○あなたは　せいとです。（學習者の一人を指して）

○あなたは　せいとです。（他の學習者を一人々々指して）

○□（他の師の姓）さんは　せんせいです。

○□（學習者の姓）さんは　せいとです。

○その他。

○わたくしは　□です。

○わたくしは　□ですか。（自分を指しながら自問する。）

はい、さうです。（頷いて自答する。）

○わたくしは　□ですか。いゝえ、さうではありません。（首を左右に振つて）

○わたくしは　□ですか、○○ですか。

わたくしは　□です。

○あなたは　□さんですか。（學習者の一人々々に向かつて）

はい、さうです。（頷いて）

○あなたは　□さんですか。

いゝえ、さうではありません。（首を左右に振つて）

○あなたは　どなたですか。

あなたは　□さんです。

○その他。

○わたくしは　せんせいですか。（自分を指して自問する。）

はい、さうです。（頷いて自答する。）

○わたくしは　せいとですか。
いゝえ、さうではありません。（首を左右に振つて自答する。）
○わたくしは　せんせいですか、せいとですか。
わたくしは　せんせいです。
○□（他の教師の姓）さんは　せんせいですか。
はい、さうです。（頷いて）
○□さんは　せいとですか。
いゝえ、さうではありません。（首を左右に振つて）
○□さんは　せんせいですか、せいとですか。
□さんは　せんせいです。
○その他。
○□さんは　せいとですか。（學習者の一人を指して自問し）
はい、さうです。（頷いて自答する。）
○□さんは　せんせいですか。
いゝえ、さうではありません。（首を左右に振つて）
○□さんは　せんせいですか、せいとですか。
□さんは　せいとです。
○その他。
○このかたは　□さんです。（學習者の一人を指して）
○このかたは　□さんですか。
はい、さうです。（頷いて）
○このかたは　□さんですか。
いゝえ、さうではありません。（首を左右に振つて）
○このかたは　どなたですか。
このかたは　□さんです。

○あのかたは　□さんですか。（少し離れてゐる學習者の一人を指して）
はい、さうです。
○あのかたは　□さんですか。
いゝえ、さうではありません。
○あのかたは　どなたですか。
□さんです。
○その他。

(四)　聽方・話方

○わたくしは　□ですか。（自分を指して）
△はい、さうです。（一齊に、また一人々々に）
○わたくしは　□ですか。
△いゝえ、さうではありません。（一齊に、また一人々々に）
○あなたは　どなたですか。
△わたくしは　□です。（一人々々に）
○このかたは　□さんですか。
○わたくしは　□ですか、○○ですか。
△□さんです。
注意　「わたくしはどなたですか。」といふ形はやゝ不自然であり、「わたくしはだれですか。」は自然ではあるが、「どなた」と「だれ」の混亂がある。よつてこの際は、この發問は用ひない方が無難であらう。
○あなたは　□さんですか。
△はい、さうです。（一人々々に）
○あなたは　□さんですか。
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○あなたは　どなたですか。
△わたくしは　□です。（一人々々に）
○このかたは　□さんですか。

△はい、さうです。（一齊に、また一人々々に）

○このかたは　□さんですか。

△いゝえ、さうではありません。（一齊に、また一人々々に）

○このかたは　どなたですか。

△この（その）かたは　□さんです。（一齊に、また一人々々に）

△○その他。

○わたくしは　せんせいですか。

△はい、さうです。（一齊に、また一人々々に）

○わたくしは　せいとですか。

△いゝえ、さうではありません。（一齊に、また一人々々に）

○わたくしは　せんせいですか、せいとですか。

△あなたは　せんせいです。（一齊に、また一人々々に）

○□さんは　せいとですか。

△はい、さうです。

○□さんは　せんせいですか。

△いゝえ、さうではありません。

○□さんは　せんせいですか、せいとですか。

△□さんは　せいとです。

△○その他。

三　備考

(一)　セートがセトに、センセーがセンセにならぬやう、またアナタ・ワタクシ・アノカタ・コノカタのタがダにならぬやうに注意する。

(二)　ワタクシのクとグとを比較練習させることが必要である。ドナタのドを教へる時も、トと比較して耳を馴れさせる必要がある。

(三)　本課から學習材料がかなり多くなるから、學習者の程度に應じて、話方の作業に手心を加へ、あまり話すことを強ひない方がよい。

第六課（第五頁）

一　教材

ペン　エンピツ　インキ　ボーシ　クツ　カバン

〇〇ワ　〇〇ノ　〇〇デス。

〔教具〕ペン・鉛筆・インキ・帽子・靴・鞄。

二　指導

(一)　要領

1　本課に於ては「ペン」「えんぴつ」「インキ」「ぼうし」「くつ」「かばん」等の學習者に最も必要な事物の名稱を「これは〇〇の〇〇です。」及び「これは〇〇の〇〇ですか。」といふ構文によつて會得させることが主眼である。

2　前課は相當に困難な教材であり、材料もかなり多量であつた故、本課に於ては相當の復習をすることが肝要である。

3　聽方に於ては、先づそれらの事物を高く掲げて、「これはえんぴつです。」といひ、數回反復して理解を確實にする。次に、ペンを高く掲げ示して、「これはあたくしのペンです。」を教へ、各自の所有を明らかにしておいて、さて「これはあたくしのペンですか。」と自問し、「はい、さうです。」「いいえ、さうではありません。」等と自答し、或は「わたくしのペンです。」などと自答する。以上の操作を「えんぴつ」「インキ」についても同樣に繰返して行ふ。

4　以上の聽方を十分に行つた後、聽方・話方に入る。先づ「これはあたくしのペンですか。」と質問する。これに對して肯定的な答及び否定的な答を學習者にさせ、更に「これはあなたのペンですか。」「これはわたくしのペンですか。」の發問に對して「わたくしのペンです。」などと、指導者も和して一齊に答へさせる。次に、「これは□さんのペンですか。」「これはどなたのペンですか。」といふ發問をして、「はい、さうです。」「いゝえ、さうではありません。」といふ肯定的な答及び否定的な答を求め、また「□さんのペンです。」といふ一般的な答をさせる。

以上はペンについての聽方・話方であるが、「えんぴつ」「インキ」「ぼうし」「くつ」「かばん」等も、同樣な操作によつて學習させる。

(二)　復習

(三)　聽方

〇これはペンです。
〇これはえんぴつです。
〇これはインキです。
以上數回反復。

○自分のペンを高く揭げて、
これは　わたくしの　ペンです。（自分の物であることを示す身振をして）
○學習者のペンを取上げて、
これは　あなたの　ペンです。
○これは　あなたの　ペンですか。（自問）
はい、さうです。（自答）
○これは　わたくしの　ペンですか。（自問）
いゝえ、さうではありません。（自答）
○これは　わたくしの　ペンですか、あなたの　ペンですか。（自問）
わたくしの　ペンです。（自答）
以上數回反復。
○順次「えんぴつ」「インキ」につき、同一作業を行ふ。

(四)　聽方・話方

○これは　わたくしの　ペンですか。（自分のペンを示して）
△はい、さうです。（指導者も和して一齊に）
○これは　あなたの　ペンですか。（學習者の一人々々に向かつて）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○これは　あなたの　ペンですか、わたくしの　ペンですか。
△あなたの　ペンです。（指導者も和して一齊に）
○「えんぴつ」「インキ」につき、同一作業を繰返して後、他の學習者の物品を取り、
これは　□さんの　インキですか。

△はい、さうです。
○これは　□さんの　インキですか。
△いゝえ、さうではありません。
○これは　どなたの　インキですか。
△□さんの　インキです。

(五)　「ばうし」「くつ」「かばん」を提示し、聽方及び聽方話方を學習させる。

三　備　考

(一)　インキのキが山東省地方を除き、チとなり易い傾向がある。
(二)　クツのツがズにならぬやう、ツとズ(ヅ)とを比較練習して會得させる。

第七課（第六頁）

一　教材

ココ／ソコ　ニ　〇〇ガ　アリマス。
イーエ、アリマセン。
スズリ　スミ　チャワン　ドビン　サラ　ハシ　サジ
ハクボク　ヒトツ　フタツ　ミッツ　ヨッツ　イツツ

〔教具〕硯・墨・茶碗・土瓶・皿・箸・匙・白墨等。

二　指導

(一)　要領

1　本課に於ては、「こゝ（そこ）」に〇〇があります。」といふ平敍と、「こゝ（そこ）」に〇〇がありますか。」といふ疑問の構文及び「すゞり」「すみ」「ちゃわん」「どびん」「さら」「はし」「さじ」はくぼく」等の事物の名稱や、「ひとつ」「ふたつ」「みっつ」「よっつ」「いつゝ」等の數詞を學習させるのが主眼である。

2　前課の復習をする。

3　聽方では、先づ本を手に取つて、指導者は「これはほんです。」といひ、この本を卓上において「こゝにほんがあります。」といふ。「すゞり」「すみ」その他の教材についても同樣に數回反復する。ついで、「こゝにほんがありますか。」と自問して、「はい、あります。」または、「いイいゝえ、ありません。」と、いづれかに自答する。「すゞり」「すみ」その他の教材についてもまた同樣である。また、「ここになにがありますか。」「そこになにがありますか。」の自問を發し、「〇〇があります。」の形で自答する。この時も、本教材のすべてに亙つて練習する。

4　聽方・話方に於ては、「こゝになにがありますか。」の指導者の發問に對して、「はい、あります。」といふ肯定的な答と、「いイいゝえ、ありません。」といふ否定的な答が、指導者も和して一齊に答へられなければならない。また、「こゝになにがありますか。」の發問に對しては、「〇〇があります。」と一般的な答が、一齊に得られなければならない。なほ、この段階での「〇〇」には、本教材のすべてがあてはめられることが最も肝要であらう。

次に、「そこに〇〇がありますか。」「そこになにがありますか。」も前記と同樣の操作をとる。なほ、數量の多いものを扱ふ時には、數へながら、例へば、ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつゝ、いつゝあります。」といふやうな扱ひをして、物の數へ方をも併せて教へるのである。

(二)　復習

(三)　聽　方

○これは　ほんです。(手に取つて)
　こゝに　ほんが　あります。(卓上において)
○これは　えんぴつです。(手に取つて)
　こゝに　えんぴつが　あります。(卓上において)
○これは　すゞりです。(手に取上げて)
　これは　すみです。(手に取上げて)
○こゝに　すゞりが　あります。(卓上において)
　こゝに　すみが　あります。(卓上において)
　以上數回反復。
○こゝに　すゞりが　ありますか。(自問)
　はい、あります。(頷いて自答)
○こゝに　かみが　ありますか。
　いゝえ、ありません。(首を左右に振つて)
○こゝに　なにが　ありますか。
　すゞりが　あります。
○その他。
○これは　ちゃわんです。(學習者の机上のを指して)
　こゝに　ちゃわんが　あります。(卓上において)
　そこに　ちゃわんが　あります。(卓上に移して)
○これは　はしです。
　こゝに　はしが　あります。(卓上)
　そこに　はしが　あります。(机上)
○これは　すゞりです。
　これは　すみです。

　こゝに　すゞりが　あります。(卓上)
　そこに　すみが　あります。(机上)
○その他。
○そこに　ちゃわんが　ありますか。
　はい、あります。(頷いて)
○そこに　すゞりが　ありますか。
　いゝえ、ありません。(首を左右に振つて)
○そこに　なにが　ありますか。
　ちゃわんが　あります。
○その他。
　(このほか「どこにちゃわんがありますか。」「こゝにあります。」を聽かせてもよい。)

(四)　聽方・話方

○こゝに　すゞりが　ありますか。(卓上の硯を指して)
△はい、あります。(指導者も和して一齊に)
○こゝに　かみが　ありますか。
△いゝえ、ありません。(指導者も和して一齊に)
○こゝに　なにが　ありますか。
△すゞりが　あります。(指導者も和して一齊に)
△○その他。
○そこに　ちゃわんが　ありますか。
△はい、あります。(指導者も和して)
○そこに　すゞりが　ありますか。
△いゝえ、ありません。(指導者も和して)
○そこに　なにが　ありますか。
△すゞりが　あります。(指導者も和して)
△○その他。

（どこに　すゞりが　ありますか。「こゝに　あります。」を練習させてもよい。）

○白墨を五箇示して、

これは　はくぼくです。

こゝに　はくぼくが　あります。

○白墨を數へながら、

ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつゝ、いつゝ　あります。

といふ。

三　備　考

(一)　チャワンのチャが、舌を上に捲いて氣息を強く出すことのないやうに注意することが必要である。ドビンのドとトとを比較練習すること。スミはアクセントによつて墨(スミ)と隅(スミ)との別が生ずること を注意しなくてはならない。ハシはアクセントによつて、橋(ハシ)、箸(ハシ)、端(ハシ)の別が生ずる。フタツのフは、口形を示してよく會得させることが必要であらう。ミッツ・ヨッツの促音が落ちて、ミツ・ヨツとならないやうに。ココ・ソコのコとゴとを比較練習することが必要である。ハクボクのボとボとを比較練習することが必要である。

(二)　本課に於ては、教材が豐富であるが、學習者に話方まで正確にさせるのではない。聽取らせることが主目的である。なほ、取捨選擇して學力と時間とに適合させるやうにすることはもとより、話方の際できる限り、指導者が援助しなくてはならない。

第八課　（第七頁）

一　教　材

○○ニ　○○ガ　イマス。
イーエ、イマセン。
○○ト　○○
ンマ　ウシ　イヌ　ネコ　ニワトリ　アヒル
ムッツ　ナナツ　ヤッツ　ココノツ　トー
ドコ　アソコ

〔教具〕馬・牛・犬・猫・鶏・家鴨等の模型または掛圖等。

二　指　導

(一)　要　領

1　本課に於ては、「○○に○○がゐます。」と、「○○に○○がありますか。」及び「○○にな

にがゐますか。」といふ構文と、それに對して、「はい、ゐます。」と「いゝえ、ゐません。」といふ肯否兩方の答を授け、同時に學習者に最も親しまれ易い「うま」「うし」「いぬ」「ねこ」「にはとり」「あひる」等の動物の名稱と、「むっつ」「なゝつ」「やっつ」「こゝのつ」「とを」等の數詞を教へるのが主眼である。なほ「○○と○○」といつた物の竝列も取扱ふ。

2　復習は前課の操作に準ずる。

3　聽方は、先づ白墨の數へ方から入る。「しろいはくぼくが○○あります。」「あかいはくぼくが○○あります。」といふやうに何遍も繰返していふ。次に掛圖を利用して「これはうまです。」といひ、そこから更に「こゝにうまがゐます。」といつて「うま」の存在を示し、「すゞりがあります。」と對比させ、「ねこがゐます。」「にはとりがゐます。」「あひるがゐます。」に對して、「すみがあります。」「つくゑがあります。」「いすがあります。」と對照させ、大體、無生物や植物には「あります。」を、人や動物には「ゐます。」を用ひることを示す。

次いで、「こゝに○○がゐますか。」の形で本教材の動物の名を入れ、「はい、ゐます。」「いゝえ、ゐません。」等の肯否兩樣の答を自答する。更に「どこに○○がゐますか。」に於ては、「こゝに／そこに」ゐます。」を以て自答する。

4　聽方・話方は、こゝでは「こゝに○○がゐますか。」「こゝになにがゐますか。」「どこに○○がゐますか。」の三つの問が基本の形として提示せられ、それに本教材の數々の動物名が用ひられることは勿論である。學習者のそれらに對する答は、「はい、ゐます。」「いゝえ、ゐません。」「○○がゐます。」等である。

5　聽方は、「ペンとえんぴつ」「うまとうし」等の如く、動物と動物、無生物と無生物とを竝列していふ。即ち、本教材のすべてに亙つて。

6　聽方・話方は、「あそこに○○と○○がゐますか。」と發問して、「はい、ゐます。」「いゝえ、ゐません。」といふ答と、「○○と○○がゐます。」といふやうな答をさせる。

(二)　復　習

(三)　聽　方

○白墨を十箇示し、

こゝに　はくぼくが　あります。

ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつゝ　むっつ　なゝつ　やっつ　こゝのつ　とを、

とを　あります。

數回反復。

○これは　しろい　はくぼくです。

これは　あかい　はくぼくです。

何遍も繰返していふ。

○しろい　はくぼくが　みっつ　あります。

あかい　はくぼくが　ふたつ　あります。

何遍も繰返していふ。

○これは　うまです。（掛圖の中の馬を指して）

これは　うしです。（掛圖の中の牛を指して。以下同じ）

これは　いぬです。

これは　ねこです。
これは　にはとりです。
これは　あひるです。
○こゝに　うまが　ゐます。
こゝに　うしが　ゐます。
こゝに　いぬが　ゐます。
こゝに　ねこが　ゐます。
こゝに　にはとりが　ゐます。
こゝに　あひるが　ゐます。
○すゞり——あります。
す　み——あります。
う　ま——ゐます。
う　し——ゐます。
つくゑ——あります。
い　ぬ——ゐます。

と對照し、大體、無生物や植物には、「あります。」動物には「ゐます。」を用ひることを示し、必要によつては、その區別を手短かに學習者の國語で說明してもよい。

○こゝに　うまが　ゐますか。
はい、　ゐます。
○こゝに　ねこが　ゐますか。
いゝえ、　ゐません。
○こゝに　なにが　ゐますか。
うまが　ゐます。
○どこに　うまが　ゐますか。
こゝに　ゐます。
○その他。

(四)　聽方・話方

○こゝに　うまが　ゐますか。（掛圖を指して）
△はい、　ゐます。（指導者も和して一齊に）
○こゝに　ねこが　ゐますか。（掛圖を指して）
△いゝえ、　ゐません。（指導者も和して一齊に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖を指して）
△うまが　ゐます。（指導者も和して一齊に）
○どこに　うまが　ゐますか。（掛圖を指して）
△そこに　ゐます。（指導者も和して一齊に）

注意　最後の場合には、なるべく學習者に手を以て指さゝせつゝ「そこ」といはせる。

(五)　聽方

ペンと　えんぴつ。（ペンと鉛筆を示しながら）
うまと　うし。（掛圖）
いぬと　ねこ。（掛圖）
すゞりと　すみ。（實物または略畫）
にはとりと　あひる。（掛圖）

(六)　聽方・話方

○あそこに　にはとりと　あひるが　ゐますか。
△はい、　ゐます。
○あそこに　いぬと　ねこが　ゐますか。
△いゝえ、　ゐません。
○あそこに　なにと　なにが　ゐますか。
（自問）
△にはとりと　あひるが　ゐます。（自答）
○その他。

三　備考

(一)　ネコのコとゴとを比較練習すること。
ニワトリのトとドとを比較練習すること。
またアヒルのヒがシにならぬやうに、ムッツ・ヤッツがムツ・ヤツにならぬやうに注意すること。

(二)　「あります」と「ります」の區別は、大體は生物と無生物によるものとしてよいが、もつと嚴密にいふと、自分の力でその居所を變更し得るかどうかによるとしなくてはならない場合があることも、心得させておく必要がある。

第九課　（第七頁）

一　教材

ウエ　シタ　コップ　マエ　ウシロ　ナカ　ソト　ヒト
ヘヤ　ヒツジ　ドンナ

ウエ
シタ
マエ
ウシロ
ナカ
ソト
ニ　○○ノ　○○ガ　イマス。　アリマス。

〔教具〕　コップ（實物）・羊（模型または掛圖）等。

二　指導

(一)　要領

1　本課に於ては、「○○の（うへ・したた・まへ・うしろ）に○○が（ゐます。ありません。）」といふ文型に、「コップ」「ひと」「へや」「ひつじ」「どんな」等の語彙を授けることが主眼である。

2　復習は前課に準ずる。

3　先づ「こゝにコップがあります。」の單なる存在を示す言葉から、更に「○○のうへにコップがあります。」「○○のしたにコップがあります。」と數回反復していふ。なほ、この操作に準じて種々の語彙を入れていひ、學習者に聽かせる。次いで、「○○の○○に○○がありますか。」といふ形で發問し、「はい、あります。」「いゝえ、ありません。」

○○があります。」等の如き答をさせる。指導者も和して一齊に答へることは從前通りである。

4　指導者は、「わたくしの○○に□さんがゐます。」といふ形で種々語り、次に、「わたくしの○○に□がゐますか。」と質問して、「はい、ゐます。」「いゝえ、ゐません。□さんがゐます。」等の答を求め、指導者も和して一齊にいふ。

5　箱の中に白墨を入れて、「はこのなかにしろいはくぼくがあります。」といひ、また掛圖を示しながら、「へやのなかにひとがゐます。」等といつて、「なかに」「そとに」をはつきりさせる。次いで、それらを、「ありますか。」といふ疑問の形で發問し、「はい、（あります。）

（ゐます。）「いゝえ、（ありません。ゐません。）」等の答を指導者も和して一齊にする。こゝでも本教材のすべてをいろ〳〵にとり入れて行ふことはいふまでもない。

(二)　復習

(三)　聽方

○これは（ワ）コップです。
こゝに　はくぼくが　あります。
こゝに　ほんが　あります。
こゝに　コップが　あります。
○つくゑの（エ）うへに　コップが　あります。（コップを卓上において）
つくゑの　したに　コップが　あります。（コップを机の下において）
○はこの　うへに　はくぼくが　あります。（箱の上の白墨を指して）
はこの　したに　ほんが　あります。（箱の下の本を指して）
○つくゑの　したに　なにも　ありません。（机の下を指して）
以上數回反復。

(四)　聽方・話方

○つくゑの　うへに　コップが　ありますか。（机の上のコップを指して）
△はい、あります。（指導者も和して一齊に）
○つくゑの　うへに　ペンが　ありますか。（机の上を指して）
△いゝえ、ありません。（指導者も和して一齊に）
○つくゑの　うへに　なにが　あります

か。(机の上を指して)
△コップが　あります。(指導者も和して一齊に)
△○その他。
○つくゑの　うへに　えんぴつが　ありますか。(机上に鉛筆をおき)
△はい、あります。(指導者も和して一齊に)
○つくゑの　したに　えんぴつが　ありますか。(机の下を指して)
△いゝえ、ありません。(指導者も和して一齊に)
○つくゑの　したに　なにが　ありますか。(机の下を指して)
△なにも　ありません。(首を左右に振つて一齊に)
△○その他。

(五)　聽　方

○わたくしの　まへに　□さんが　ゐます。(一學習者の前に立ち)
○わたくしの　うしろに　□さんが　ゐます。(その學習者に背を向けて)
○わたくしの　まへに　つくゑが　あります。(教卓と黑板の間に立つて)
○わたくしの　うしろに　こくばんが　あります。
○その他。

(六)　聽方・話方

○わたくしの　まへに　□さんが　ゐますか。(一學習者の前に立ち)
△はい、ゐます。(指導者も和して一齊に)
○わたくしの　まへに　□さんが　ゐますか。(居合はさない學習者の姓を呼んで)
△いゝえ、ゐません。(指導者も和して一齊に)
○わたくしの　まへに　どなたが　ゐますか。(一學習者の前に立ち)
△□さんが　ゐます。(指導者も和して一齊に)
○わたくしの　うしろに　こくばんが　ありますか。(教卓と黑板の間に立つて)
△はい、あります。(指導者も和して一齊に)
○わたくしの　うしろに　つくゑが　ありますか。(教卓と黑板の間に立つて)
△いゝえ、ありません。(指導者も和して一齊に)
○わたくしの　うしろに　なにが　ありますか。(教卓と黑板の間に立つて)
△こくばんが　あります。(指導者も和して一齊に)
△○その他。

(七)　聽　方

○箱の中に白墨を入れて、
はこの　なかに　しろい　はくぼくが　あります。
はこの　そとに　あかい　はくぼくが　あります。
○掛圖を示しながら、
へやの　なかに　ひとが　ゐます。
へやの　そとに　ひつじが　ゐます。
へやの　そとに　わたくしが　ゐます。
(室外に出て)
○その他。

(八)　聽方・話方

○はこの　なかに　しろい　はくぼくが　ありますか。(箱の中に白墨を入れて)

△はい、あります。(指導者も和して一齊に)

○はこの　なかに　あかい　はくぼくが　ありますか。(箱の中に赤い白墨を入れておかないで)

△いゝえ、ありません。(指導者も和して一齊に)

○はこの　そとに　どんな　はくぼくが　ありますか。(箱の外に赤い白墨をおいて)

△あかい　はくぼくが　あります。(指導者も和して一齊に)

△○その他。

三　備　考

コップがコブにならぬやうに、ヒトのヒがシにならぬやうに、ソト・ヒトのトとドとを比較練習するやうに注意すべきであらう。

第十課　(第八頁)

一　教　材

○○ワ　○○テイマス。
○○ワ　○○オ　○○テイマス
コシカケ　タッテ　アルイテ　コドモ　ハシッテ　ジ
カイテ　ヨンデ　オ　モ　シテ　オトコノコ
オンナノコ　ドー

〔教具〕掛圖。

二　指　導

(一)　要　領

1　本課に於ては、「○○は○○てゐます。」「○○は○○を○○てゐます。」「○○も○○を○○てゐます。」等の構文に加へて、「たって」「あるいて」「こども」「はしって」「と」

「かいて」「よんで」「も」「を」「とこのこ」「をんなのこ」「どう」等の語彙も學習させようといふのが主眼である。

2　復習は前課に準ずる。

3　聽方に於ては、指導者はそれ〴〵の動作をしながら、例へば「わたくしはこしかけてゐます。」等の如く話し、「○○は○○てゐます。」といふ形で種々の材料を入れて話し、以上數回反復の後、例へば「わたくしはこしかけてゐますか。」等の如く、腰掛けた動作のまゝ自問し、「はい、こしかけてゐます。」の如く自答する。かくて「○○は○○てゐますか。」に對して「はい、○○てゐます。」「いゝえ、○○てゐません。」等の自問自答を繰返す。また、前記の語彙を巧みに使用して自問自答し、學習者の發表を促すやうにする。

4　聽方・話方に於ては、先づ「わたくしは○○てゐますか。」と發問して「はい、○○てゐます。」「いゝえ、○○てゐません。○○てゐます。」等の答を求める。即ち、指導者も和して一齊に答へる。

次いで「わたくしは○○てゐますか、○○てゐますか、○○てゐますか。」と發問して、その中の一方の「○○てゐます。」を答へさせる。また「あなたは○○てゐますか。」とか、「あなたも○○てゐますか。」等に對しては、「はい、○○てゐます。」「いゝえ、○○てゐません、○○てゐます。」等の答をする。これもまた指導者も和して一齊に答へるやうにする。

なほ、「○○」には本教材をあてはまるだけあてはめて、教授の豐かさを圖るやうにする。

(二)　復　習

(三)　聽　方

○指導者はそれ〴〵の動作をしながら話す。

わたくしは　こしかけてゐます。
わたくしは　たってゐます。
わたくしは　あるいてゐます。

以上數回反復。

○わたくしは　こしかけてゐますか。（自問）

はい、こしかけてゐます。（自答）

わたくしは　たってゐますか。（腰掛けたまゝ）

いゝえ、たってゐません。（自答）

わたくしは　こしかけてゐますか、たってゐますか。（自問）

わたくしは　こしかけてゐます。（自答）

以上數回反復。（學習者の狀態により、多少答へさせてもよい。）

○次に白墨を一箇示して、

これは　はくぼくです。
これも　はくぼくです。（更に一箇を示して）
これも　はくぼくです。（更にまた一箇を示して）

○鉛筆、ペンなどで同じやうに聽かせる。

○一學習者に向かつて、

あなたは　せいとです。
あなたも　せいとです。（他の學習者に向かつて）
あなたも　せいとです。（更に他の學習者に向かつて）

○一學習者に向かつて、

あなたは　こしかけてゐます。
あなたも　こしかけてゐます。（他の學習者に向かつて）
あなたも　こしかけてゐます。（更に他の學習者に向かつて）
○掛圖を指して、
あの　こどもは　はしつてゐます。
あの　いぬも　はしつてゐます。
○漢字を板書して、
これは　じです。
わたくしは　じを（オ）　かいてゐます。
○自問自答によつて、
わたくしは　じを　かいてゐますか。
はい、じを　かいてゐます。
わたくしは　あるいてゐますか。
いゝえ、あるいてゐません。
わたくしは　なにを　してゐますか。
じを　かいてゐます。
○掛圖を指して、
をとこのこが　じを　かいてゐます。（オ）
をんなのこが　ほんを　よんでゐます。（オ）
○前項のやうに自問自答する。

(四) 聽方・話方

○わたくしは　たつてゐますか。（指導者は起立して）
△はい、たつてゐます。（指導者も和して一齊に）
○わたくしは　こしかけてゐますか。（起立のまゝで）
△いゝえ、こしかけてゐません。（指導者も和して一齊に）
○わたくしは　どうしてゐますか。（ドウ）（起立のまゝで）
△たつてゐます。（指導者も和して一齊に）

○わたくしは　たつてゐますか、　こしかけてゐますか。（起立のまゝで）
△たつてゐます。（指導者も和して一齊に）
○あなたは　こしかけてゐますか。（一學習者に向かつて）
△はい、こしかけてゐます。
○あなたは　たつてゐますか。
△いゝえ、たつてゐません。
○あなたは　どうしてゐますか。
△こしかけてゐます。
○あなたも　こしかけてゐますか。（他の學習者に向かつて）
△はい、（わたくしも）こしかけてゐます。
以上數回反復。

三　備　考

タッテガタテにならないやうに、また、ハシッテの促音を正しくさせるやうに指導しなくてはならない。

第十一課 （第九頁）

一 教材

コレワ ホンデス。

構文 **コレワ ○○デス。**

語彙 **コレ ワ ホン デス**

符號 **コ レ ワ ホ ン デ ス**

〔教具〕 本・箱・紙。

二 指導

(一) 要領

1 聽方としては、既に學習させてある構文や語彙を、話方として學習させることか本課以下の要領である。

2 聽方に於て培はれた話方の力を基礎として、聽方學習に於て附帶的に行つて來た發音練習を一歩進める形で、話方學習に入らせるのが本課の建前である。

3* 本課の教材を導くやうな既習の平易

な聽方教材を復習して、會話氣分を養つた上に、本課教材の學習に入らせる工夫か肝要である。

4 いふまでもなく、話言葉そのものの修得が眼目であつて、符號の文字は、單に見ておぼえさせることを限度とし、書くことの學習は行はせない。

5 以下の問答のほかに、既習語彙や構文を使つて聽方の學習を十分にする必要がある。

6 本頁以下二十一頁までの教材は、構文に於てはいづれも「です型」とそれの發展であることを念頭において指導すべきである。

(二) 指導

1 復習

○本を高く揭げ示しながら、
　これは ほんです。
　と數回繰返していふ。（種々の形の本を示して）
○紙を高く揭げ示しながら、
　これは かみです。
　と數回繰返していふ。
○箱を高く揭げ示しながら、
　これは はこです。
　と數回繰返していふ。
○次に箇々の事物を示しながら、
　これは はこです。
　これは かみです。
　これは ほんです。
　といふ。

2 問答

(1) ほんです。

○これは　ほんですか。(本を掲げ示して)
△はい、さうです。(一人々々に)
○これは　はこですか。(本を掲げ示して)
△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)
○これは　かみですか。(本を掲げ示したまゝ)
△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)
○これは　なんですか。(本を掲げ示したまゝ)
△ほんです。(一人々々に)
○黒板に、
ホン
と書き、**ホ・ン**——**ホン**と、一音々々はつきりするやうにいふ。
△**ホ・ン**——**ホン**　(一人々々に)
○黒板　(**ホン**の下)に、
デス
と書き、**デ・ス**——**デス**と、一音々々はつきりするやうにいふ。
△**デ・ス**——**デス**　(一人々々に)
○これは　なんですか。(黒板を離れ、本を掲げて)
△ほんです。(一人々々に)
(2)　これは
○それは　なんですか。(學習者の机上の紙を指して)
△これは　かみです。(指導者も和して一人一人に)
○それは　なんですか。(學習者の机上の箱を指して)
△これは　はこです。(指導者も和して一人一人に)

○それは　なんですか。(學習者の机上の本を指して)
△これは　ほんです。(指導者も和して一人一人に)
○黒板　(**ホンデス**の上)に、
コレワ
と書き、**コ・レ・ワ**——**コレワ**と、一音々々はつきりするやうにいふ。
△**コ・レ・ワ**——**コレワ**　(一人々々に)
○これは　ほんです。(一語々々はつきりするやうに、何遍も繰返していふ。)
△これは　ほんです。(一人々々に)
○**コレワ　ホンデス**。(本の第九頁を開かせて)
△**コレワ　ホンデス**。(一人々々に)
○それは　なんですか。(本から離れ、机上の本を指して)
△これは　ほんです。(一人々々に)
3　總括
これは　○○です。
○それは　なんですか。(机上の紙を指して)
△これは　かみです。(一人々々に)
○黒板上の**ホン**を消し、その位置に紙を掲げて、
これは　かみです。
といふ。
△これは　かみです。(一人々々に)
○同様に箱を掲げて
これは　はこです。
といふ。
△これは　はこです。(一人々々に)
△○その他。

三　備　考

(一)　コレワのコレかクレまたはコーレ・コレイ・コラエなどと訛り易い。正しく發音させる指導が必要と思はれる。コレ、コレ……と輕くいはせるために、早口にいはせて矯正することもその一方法である。

(二)　ホンのホが、喉の奥から發せられる傾向に陷り易い。カミのカが有氣音になり易い。注意を拂はなくてはならない。なほ、デスのスの母音は無聲化する。また日本語のンにはm n ngの三種がある。これはngに近いnであることに注意して指導すること。

(三)　本課以下發音記號を用ひてゐるが、それは繪畫と同じやうに、復習のための備忘用であつて、讀本ではないことを忘れてはならない。

第十二課　（第十頁）

一　教　材

ソレワ　カミデス。
構文　ソレワ　〇〇デス。
語彙　ソレ　カミ
符號　ソ　カ　ミ
〔教具〕　紙・本・箱等。

二　指　導

(一)　要　領

1　前頁と併せて、「これは〇〇です。」「それは〇〇です。」の構文を話させ、「これ」「それ」がともに指示代名詞であり、その中、「これ」は話者の身近なものを、「それ」は聽者の身近なものを指示することを理解させるのが、指導の要領である。

2　既習の聽方で學習させた語彙を用ひて、この構文を聽きわけることに馴れさ

せ、更に進んで、それを話すことのできる段階に到らせることが眼目である。なほ、第三課と連絡することが必要である。

(二) 問　答

1　復習

○これはワ　ほんです。(本を掲げ示して)

これは　かみです。(紙を掲げ示して)

それは　かみです。(學習者の机上にある紙を指して)

それは　ほんです。(學習者の机上にある本を指して)

以上數回反復。

○これは　ほんです。(學習者に近づき、その机上の本に手を觸れて)

△これは　ほんです。(指導者も和して一齊に)

○これは　かみです。(學習者に近づき、その机上の紙に手を觸れて)

△これは　かみです。(指導者も和して一齊に)

○それは　いすです。(學習者に近づき、教壇上の椅子を指して)

△それは　いすです。(指導者も和して一齊に)

○それは　こくばんです。(學習者に近く立つたまゝ)

△それは　こくばんです。(指導者も和して一齊に)

以上數回反復。

2　提示

(1)　かみです

○これは　ほんですか。(本を高く掲げ示して)

△はい、さうです。(指導者も和して一人一人に)

○これは　ほんですか。(箱を高く掲げ示して)

△いゝえ、さうではありません。(指導者も和して一人々々に)

○これは　なんですか。(箱を掲げたまゝ)

△はこです。(指導者も和して一人々々に)

○これは　はこですか。(紙を高く掲げ示して)

△いゝえ、さうではありません。(指導者も和して一人々々に)

○これは　なんですか。(紙を掲げたまゝ)

△かみです。(指導者も和して一人々々に)

○黑板に、

カミデス

と書き、それを指しながら、**カ・ミ——カミ**と何遍も繰返していふ。

△**カ・ミ——カミ**(指導者も和して一人一人に)

○かみです。(何遍も繰返していふ。)

△かみです。(一人々々に)

(2)　それは

○それは　なんですか。(學習者の腰掛を指して)

△これは　こしかけです。(指導者もその腰掛に近づき、和して一人々々に)

○それは　なんですか。(學習者の本を指して)

△これは　ほんです。(指導者も學習者に近寄り、和して一人々々に)

○これは　なんですか。(椅子に手を觸れて)

△それは　いすです。(學習者の席に近づ

き、指導者も和して一人々々に)
○これは　なんですか。(本を高く揭げ示して)
△それは　ほんです。(指導者も和して一人一人に)
○これは　なんですか。(紙を揭げ示して)
△それは　かみです。(指導者も和して一人一人に)
○黒板　(**カミデス**の上方に、
ソレワ
と書き、**ソ・レ・ワ**——**ソレワ**と何遍も繰返していふ。
△**ソ・レ・ワ**——**ソレワ**　(指導者も和して一人一人に)
○**ソレワ　カミデス**。(黒板を見て、一語一語はつきりと何遍も繰返していふ。)
△**ソレワ　カミデス**。(指導者も和して一人一人に)
○本の第十頁を開かせて、
ソレワ　カミデス。
△**ソレワ　カミデス**。(一人々々に)
○これは　なんですか。(本から離れ、紙を高く揭げて)
△それは　かみです。(一人々々に)

(3)　總括

○{これ/それ}は　○○です。
○それは　なんですか。(腰掛を指して)
△これは　こしかけです。(指導者も和して一人々々に)
○それは　なんですか。(椅子に手を觸れて)
△これは　いすです。(指導者も和して一人一人に)
○これは　なんですか。(本を高く揭げて)

△それは　ほんです。(一人々々に)
○これは　なんですか。(紙を揭げて)
△それは　かみです。(一人々々に)
○それは　なんですか。(學習者の机上の紙を指して)
△これは　かみです。(一人々々に)
○黒板　(**ソレワ　カミデス**の**ソレワ**の右傍)に、
コレワ
と竝べて書き、**コレワ　カミデス**と何遍も繰返していふ。
△**コレワ　カミデス**。(一人々々に)
○**コレワ　カミデス**。(黒板を指して)
ソレワ　カミデス。(黒板を指して)
△**コレワ　カミデス**。
ソレワ　カミデス。(一齊に)
○黒板を離れて、
これは　なんですか。(紙を揭げて)
△それは　かみです。(一人々々に)
○それは　なんですか。(學習者の机上の紙を指して)
△これは　かみです。(一人々々に)

三　備考

デスのデがテになり易いから、デとテとを比較して練習させ、カミのカを有氣音にならないやうに注意することが肝要である。

第十三課　（第十一頁）

一　教材

コレワ　ツクエデスカ。
ハイ、ソーデス。

構文　コレワ　○○デスカ。

語彙　カ　ハイ　ソー

符號　ツ　ク　エ　ハ　イ　ー

〔教具〕紙・本等。

二　指導

(一)　要領

1　前二頁の教材は、聽いて復唱するか答へるかであつたが、この頁の教材は、問ふ構文をいはせる方向に新しく指導することが必要である。

2　「か」が疑問詞であることを、說明でなく、練習で會得させることが肝要である。

なほ、第三課と連絡することが便宜であらう。

(二)　問答

1　復習

○これはッ　かみです。（本を揭げて）
　それは　ほんです。（學習者の机上の本を指しながら）
　これは　いすです。（椅子に手をかけて）
　それは　こしかけです。（學習者の腰掛を指しながら）

順序を變へなどして數回反復する。

○これは　なんですか。（紙を揭げて）
△それは　かみです。（一人々々に）
○それは　なんですか。（机上の本を指して）
△これは　ほんです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（紙を揭げて）
△それは　かみです。（一人々々に）

2　提示

○これは　いすですか。（椅子に手を觸れて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　こしかけですか。（學習者の腰掛を指して）
△はい　さうです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（教卓に手を觸れて）
△それは　つくゑです。（一人々々に）

注意「つくゑ」の發音に注意する必要がある。

○それは　なんですか。（學習者の机を指して）
△これは　つくゑです。（一人々々に）

○黒板に、
コレワ　ツクエデス
と書き、**ツ・ク・エ**——**ツクエ**と何遍も繰返していふ。
△**ツ・ク・エ**——**ツクエ**（一齊に、また一人一人に）
○**コレワ　ツクエデス**。（黒板の符號を一つ一つ指しながらいふ。）
△**コレワ　ツクエデス**。（一齊に）
○これは　なんですか。（本を揭げて）
△それは　ほんです。（一人々々に）
○これは　ほんですか。（本を揭げたまゝ）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　かみですか。（紙を揭げて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　いすですか。（椅子に手を觸れて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　つくゑですか。（敎卓に手を觸れて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○黒板（**コレワ　ツクエデス**の下）に、
カ
を書添へ、
ハイ　ソーデス
と書加へて、一つ〳〵はつきりいふ。
コレワ　ツクエデスカ。
ハイ、ソーデス。
○本の第十一頁を開かせて、
コレワ　ツクエデスカ。
ハイ、ソーデス。
と、一つ〳〵はつきりいふ。
△**コレワ　ツクエデスカ。**
ハイ、ソーデス。（一人々々に）

△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　つくゑですか。（敎卓に手を觸れて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○本を離れて、
これは　いすですか。（椅子に手を觸れて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　つくゑですか。（敎卓に手を觸れて）
△はい　さうです。（一人々々に）
3　總括
これ（それ）は　○○ですか。
はい、さうです。
○これは　こくばんですか。（黒板に手を觸れて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　ほんですか。（机上の本を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　つくゑですか。（机を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）

三　備考

(一)　ソーデスがソデスになり易いから、十分に練習する必要がある。ツクエのクが有聲音になり易いから、注意する必要がある。なほ、ツクエのクは無聲化母音である。

(二)　學習者に發問させる方向に導くのであるが、方法としては、指導者からの發問を、はつきり聽きわけて、それに適合した答をさせる程度に止めなくてはならないであらう。

第十四課　（第十二頁）

一　教材

ソレワ　コシカケデスカ。

イーエ、ソーデワアリマセン。

構文　**イーエ、ソーデワアリマセン。**

語彙　**コシカケ　イーエ　デワアリマセン**

符號　**シ　ケ　セ　マ　リ　ア**

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　問の構文は前頁の復習である。たゞ「これは」が「それは」に變つただけが新しい。

2　答が否定型になつてゐるところが、前課と異なる點である。

(二)　問答

1　復習

○それは　こしかけですか。（腰掛を指して）

△はい、さうです。（一人々々に）

○これは　いすですか。（椅子に手を觸れて）

△はい、さうです。（一人々々に）

○これは　つくゑですか。（教卓に手を觸れて）

△はい、さうです。（一人々々に）

○これは　つくゑですか。（机を指して）

△はい、さうです。（一人々々に）

2　提示

○これは　つくゑですか。教卓に手を觸れて）

△はい、さうです。（一人々々に）

○これは　こしかけですか。（椅子に手を觸れて）

△はい、さうです。（一人々々に）

○それは　こしかけですか。（腰掛を指して）

△はい、さうです。（一人々々に）

○黑板に

ソレワ　コシカケデスカ

と書き、一語々々はつきりいふ。

△**ソレワ　コシカケデスカ。**（一齊に）

○黑板を離れて、

それは　こしかけですか。（學習者の腰掛を指して）

△はい、さうです。（一人々々に）

○これは　こしかけですか。（椅子に手を觸れて）

△いゝえ　さうではありません。（指導者も和して一人々々に）

○黑板に
イーエ　ソーデワアリマセン
と書き、それを指して、一語々々はつきりいふ。
△**イーエ、ソーデワアリマセン。**（一齊に、また一人々々に）
○本の第十二頁を開かせて、
ソレワ　コシカケデスカ。
イーエ、ソーデワアリマセン。
△**ソレワ　コシカケデスカ。**
イーエ、ソーデワアリマセン。（一人一人に）
○本を離れて、
それは　いすですか。（腰掛を指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○これは　つくゑ（エ）ですか。（椅子に手を觸れて）
△いゝえ　さうではありません。（一人一人に）

3　總括

○これは　めですか。（眼を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　はなですか。（鼻を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　くちですか。（口を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　くちですか。（眼を指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○これは　なんですか。（眼を指したまゝ）
△それは　めです。（一人々々に）
○これは　はなですか。（口を指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○これは　なんですか。（口を指したまゝ）
△それは　くちです。（一人々々に）
○それは　いすですか。（腰掛を指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○それは　なんですか。（腰掛を指したまま）
△これは　こしかけです。（一人々々に）
（物を變へて反復練習する。）

三　備　考

(一)　イーエのイー、ソーデスのソーが、イエ・ソデスにならぬやうに注意することが必要である。デスがテスにならぬやうに注意して練習することが必要である。

(二)　板書を見ていはせ、本を見ていはせるのは、話言葉の練習のための備忘に役立たせるためであつて、文字として書かせ、文として讀ませるためではないことに留意しなくてはならない。

第十五課　（第十三頁）

一　教材

アレワ　ナンデスカ。
アレワ　マドデス。

構文　アレワ　ナンデスカ。

語彙　アレ　ナン　マド

符號　ナ　ド

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　「これ」「それ」「あれ」は なんですか。」といふ構文は、外國語學習の入門に當つて、最も多く用ひられる問答形式である。

2　「これ」「それ」に續いて「あれ」を學習させよ

うとすることも、この教材の一眼目である。「あれ」は話手からも、その相手からも離れた場所にあるものを指す代名詞である。「これ」「それ」「あれ」の相違を、距離を基準として、それ〴〵近・中・遠として考へる向きもあるが、むしろ話手とその相手に對する位置を基準として、「これ」は話手に近い場所にあるもの、「それ」は相手に近い場所にあるもの、「あれ」は話手からも相手からも離れた場所にあるものとして理解する方が一層根本的である。指導の方法としては、最初は説明よりも指導の方向に注意させ、直接に會得させることが適切である。なほ、第四課と連絡することが有效である。

(二)　問答

1　復習

○これは　かみですか。（紙を揭げて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　ほんですか。（本を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　つくゑですか。（机を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　こしかけですか。（腰掛を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○これは　こしかけですか。（椅子に手を觸れ）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○これは　なんですか。（椅子に手を觸れたまゝ）
△それは、いすです。（一人々々に）

○それは　なんですか。（腰掛を指して）
△これは　こしかけです。（一人々々に）
（既習語彙を用ひて、「これ」「それ」はなんですか。」の聽方を復習する。）

2　提示

(1)　まどです。
○これは　つくゑです。（教卓に手を觸れて）
これは　いすです。（椅子に手を觸れて）
これは　こくばんです。（黑板に手を觸れて）
これは　こしかけです。（腰掛に手を觸れて）
これは　まどです。（窓に近づき、手を觸れて）
何遍も繰返していふ。
○これは　なんですか。
△それは　まどです。
○黑板や〻下方に、
マドデス
と書き、**マ・ド**——**マド**と何遍も繰返していふ。
△**マ・ド**——**マド**。（一齊に、また一人々々に）

(2)　あれは　まどです。
○これは　なんですか。（窓に手を觸れて）
△それは　まどです。（一人々々に）
○教壇上に歸つて、
これは　なんですか。（黑板に手を觸れて）
△それは　こくばんです。（一人々々に）
○それは　なんですか。（學習者の机を指して）
△これは　つくゑです。（一人々々に）
○あれは　なんですか。（窓を指して）

△あれは　まどです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○「これは」といつて、その物を手に取上げ、またはその物に手を觸れて「〇〇です。」といひ、「それは」といつて、相手の物または相手の身近にある物を指して「〇〇です。」といひ、「あれは」といつて、自分からも、相手からも離れてゐる物を指して「〇〇です。」といひ、既習語彙を用ひて何遍も繰返して、「これ」「それ」「あれ」の區別を會得させた後、
これは　いすですか。（椅子に手を掛けて）
△はい、さうです。（一人々々に）
○それは　つくゑですか。（机を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○あれは　まどですか。（窓を指して）
△はい、さうです。（一人々々に）
○黑板（**マドデス**の上方）に、
アレワ
と書き、**ア・レ・ワ**——**アレワ**と何遍も繰返していふ。
△**ア・レ・ワ**——**アレワ**（一齊に、また一人一人に）

(3)　あれは　なんですか。
○これは　なんですか。（本を揭げて）
△それは　ほんです。（一人々々に）
○それは　なんですか。（その本を學習者の机上に移しておいて）
△これは　ほんです。（一人々々に）
○あれは　なんですか。（その本を更に黑板の前に移し、指導者も黑板から離れて）
△あれは　ほんです。（「あれは」といはせるために、指導者も和して一人々々に）

以上既習の他の材料により、數回反復。

○黒板に、

アレワ　ナンデスカ

と書き、一語々々はつきりと何遍も繰返していひ、やがて**アレワ　ナンデスカ。**

アレワ　マドデス。と自問自答式にいふ。

△**アレワ　ナンデスカ。**

アレワ　マドデス。

○本の第十三頁を開かせて、

アレワ　ナンデスカ。

アレワ　マドデス。

△**アレワ　ナンデスカ。**（一人々々に）

アレワ　マドデス。

○本から離れて、

あれは　なんですか。（窓を指して）

△あれは　まどです。（一人々々に）

○あれは　なんですか。（窓外の家を指して）

あれは　いへです。（指導者も和して一人一人に）

3　總括

○これは　なんですか。（机を指して）

△それは　つくゑです。（一人々々に）

○それは　なんですか。（机上の本を指して）

△これは　ほんです。（一人々々に）

○あれは　なんですか。（窓を指して）

△あれは　まどです。（一人々々に）

その他、既習語彙を用ひて練習を行ふ。

三　備考

(一)　マドのドがまぎれ易いから、トとドの區別をはつきりさせる指導が必要である。

(二)　問答氣分を、できるだけ十分に會得させたい。

第十六課　（第十四頁）

一　教材

ワタクシワ　センセーデス。
アナタワ　セートデス。

構文　ワタクシワ　〇〇デス。
　　アナタワ

語彙　ワタクシ　センセー　アナタ　セート

符號　ト　タ

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　問答の土臺である問ふ者と答へる者の關係をはつきりさせるために、「わたくし」と「あなた」との對立關係を意識させるのが要領である。

2　「わたくし」「あなた」の關係がはつきりした上に、やがて「このかた」「そのかた」「あのかた」を教へ、進んでは「どなた」を知らせることによつて、人に關する代名詞が一通り學習できるはずである。この課は、さういふ、人に關する代名詞の基礎を學ばせる意味でも重要な教材である。

2　既に聽方で學習したところを、少しづつ話させる方向へ導くのが本課の主眼である。殊に、構文としては、第十一・十二課で學習したところであるが、それが對人關係になつてゐるところに、新しい學習を要する點があることを見逃してはならない。

(二)　問答

1　復習

〇これは　なんですか。（鼻を指して）
△それは　はなです。（一人々々に）
〇これは　なんですか。（口を指して）
△それは　くちです。（一人々々に）
〇それは　なんですか。（學習者の頭を指して）
△これは　あたまです。（一人々々に）
〇あれは　なんですか。（學習者の席に近くゐて、黑板を指して）
△あれは　こくばんです。（一人々々に）
〇あれは　なんですか。（黑板拭きを指して）
△あれは　こくばんふきです。（一人々々に）

2　提示

1)　わたくし・あなた

〇わたくしは　□です。（自分を紹介す

る身振で)

△あなたは　□さんです。(學習者の一人を指して)

學習者の一人々々に對して繰返していふ。

○わたくしは　□ですか。(自分を指して)

△はい、さうです。(一人々々に)

○あなたは　□さんですか。(學習者の一人々々に)

△はい、さうです。(一人々々に)

○わたくしは　□ですか。(自分を指して他の姓をいふ。)

△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)

○あなたは　□さんですか。(學習者の一人に對して他の姓をいふ。)

△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)

○あなたは　□(○○)です。(指導者も和して一人々々に)

○わたくしは　□ですか、○○ですか。

△あなたは　□(○○)さんです。(指導者も和して一人々々に)

○黒板に

ワタクシワ

と書き、**ワ・タ・ク・シ・ワ**——**ワタクシワ**と、何遍も繰返していふ。

△**ワ・タ・ク・シ・ワ**——**ワタクシワ**　(一齊に、また一人々々に)

○黒板に

アナタワ

と書き、**ア・ナ・タ・ワ**——**アナタワ**と、何遍も繰返していふ。

△**ア・ナ・タ・ワ**——**アナタワ**　(一齊に、また一人一人に)

(2)　せんせい・せいと

○わたくしは　せんせいです。(自分を指して)

あなたは　せいとです。(學習者を指して)

□さんは　せんせいです。(他の教師の姓をいふ。)

○○さんは　せいとです。(學習者の姓をいふ。)

○わたくしは　せんせいですか。(自分を指して)

△はい、さうです。(一人々々に)

○あなたは　せいとですか。(學習者の一人を指して)

△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)

○あなたは　せいとです。(一人々々に)

△はい、さうです。(一人々々に)

○わたくしは　せんせいですか、せいとですか。

△あなたは　せんせいです。(指導者も和して一人々々に)

○あなたは　せんせいですか、せいとですか。

△わたくしは　せいとです。(指導者も和して一人々々に)

○□さんは　せんせいですか、せいとですか。(學習者の一人を指して)

△□さんは　せいとです。(一人々々に)

○○○さんは　せんせいですか、　せいと
ですか。（他の教師の姓をいふ。）
△○○さんは　せんせいです。（一人々々
に）
○黒板（**ワタクシワ**の下）に
センセーデス
と書き、**セ・ン・セー**――**センセー**と、何遍も
繰返していふ。
△**セ・ン・セー**――**センセー**（一齊に、また一
人一人に）
○黒板（**アナタワ**の下）に
セートデス
と書き、**セ・ー・ト**――**セート**と、何遍も繰返
していふ。（一齊に、また一人々々に）
△**セート**――**セート**
○本の第十四頁を開かせて、
ワタクシワ　センセーデス。
アナタワ　セートデス。
と、一語々々はつきりいふ。
△**ワタクシワ　センセーデス。**
アナタワ　セートデス。（一齊に、また一
人一人に）
3　總括
○あなたは　□さんですか、○○さん
ですか。
△わたくしは　□（○○）です。（一人々々
に）
○あなたは　せんせいですか、　せいとで
すか。
△わたくしは　せいとです。（一人々々に）
○わたくしは　□ですか、○○ですか。
△あなたは　□（○○）さんです。（一人一
人に）
○わたくしは　せんせいですか、　せいと

ですか。
△あなたは　せんせいです。（一人々々に）

三　備　考

(一)　センセーがセンセに、セートがセーにならぬやうに、またワタクシがワダクシに、アナタがアナダにならぬやうに注意することが肝要である。
(二)　第五課で行つた聽方學習を復習しながら、話方學習に導く工夫が必要である。

第十七課　（第十五頁）

一　教材

アナタワ　ナカムラサンデスカ。
イーエ、ソーデワアリマセン。
ワタクシワ　サトーデス。

構文　イーエ、ソーデワアリマセン。

語彙　ナカムラサン　サトー

符號　ムラ　サ

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　前課を基礎として、相手の姓を問答する會話樣式の學習である。

2　肯定・否定問答としては、既に第十三・十四課で學習したところであるが、それが對人關係になつてゐることと、否定の後に、それの修正が提言せられてゐることに新しい學習內容がある。

3　實際の會話としては、かういふ問は、相手の姓がほゞ明らかな場合でなくては發しないのが、一般の禮儀である。しかし、時にかうした勘違ひもないことはないから、それを心得ておくことも必要である。しかし、こゝでは、對人關係問答に於て、否定に伴なふ修正提言の樣式を學習させることが主眼である。

(二)　問答

1　復習

○あなたは　せんせいですか。

△いゝえ、さうではありません。

○あなたは　せいとですか。

△はい、さうです。

○わたくしは　せいとですか。

△いゝえ、さうではありません。

○わたくしは　せんせいですか。

△はい、さうです。

○あなたは　せんせいですか、せいとですか。

△わたくしは　せいとです。

○わたくしは　せんせいですか、せいとですか。

△あなたは　せんせいです。

2　提示

○わたくしは　□ですか。（自分を指して）

△はい、さうです。（一人々々に）

○あなたは　○○さんですか。(學習者の一人々々に)
△はい、さうです。(一人々々に)
○わたくしは　○○ですか。(自分を指して)
△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)
○あなたは　□さんですか。(學習者の一人々々に、わざと他の姓をいふ。)
△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)
○あなたは　□さんですか、○○さんですか。(學習者の一人々々に)
△わたくしは　□(○○)です。(一人々々に)
○あなたは　□さんですか。(學習者の一人にわざと他の姓をいふ。)
△いゝえ、さうではありません。わたくしは　○○です。(一人々々に)
○本の第十五頁を開き、
アナタワ　ナカムラサンデスカ。
イーエ、ソーデワアリマセン。ワタクシワ　サトーデス。
と何遍も繰返していふ。
△**アナタワ　ナカムラサンデスカ**
イーエ、ソーデワアリマセン。ワタクシワ　サトーデス。(一齊に、また一人一人に)
○本を離れて、
あなたは　□さんですか。(學習者の一人々々に、わざと他の姓をいふ。)
△いゝえ、さうではありません。わたくしは　○○です、

3　總括

○あなたは　せんせいですか。(學習者の一人々々に)
△いゝえ、さうではありません。わたくしは　せいとです。(一人々々に)
○わたくしは　せいとですか。(學習者の一人々々に)
△いゝえ、さうではありません。あなたは　せんせいです。(一人々々に)

三　備考

(一)　ワタクシワのタが、ダに訛らないやうに注意することが肝要である。
(二)　イーエがイエに、ソーデワがソデワにならぬやうに注意する必要がある。
(三)　「わたくし」「あなた」の關係に立つた基本的な問答の修得及び練習である。さうして、第三人稱學習の基礎をつくるべきである。

第十八課　（第十六頁）

一　教材

構文　コノカタワ　タナカサンデス。
　　ソノカタワ　ヤマモトサンデス。

語彙　コノカタ　ソノカタ　タナカサン　ヤマモトサン

符號　ノ　ヤ　モ

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　「わたくし」と「あなた」といふ相對關係を基礎として、第三人稱としての「このかた」「そのかた」とその實際の用法について學ばせることが主眼である。

2　日常に於ては、人を紹介する場合などに用ひられる構文である。

3　聽方としては既に學習したところであるが、一歩々々話方に向かはせるところに、この課の要領がある。

(二)　問答

1　復習

○あなたは　せいとですか。
△はい、さうです。
○あなたは　せんせいですか。
△いゝえ、さうではありません、わたくしは　せいとです。
○あなたは　□さんですか、○○さんですか。
△わたくしは　□です。
○わたくしは　せんせいですか、せいとですか。
△あなたは　せんせいです。
○□さんは　せいとですか。
△はい、さうです。
○□さんは　せんせいですか。
△いゝえ、さうではありません。
○□さんは　せんせいですか、せいとですか。
△□さんは　せいとです。

2　提示

○わたくしは　□です。
　あなたは　○○さんです。一人々々の學習者に對して
△わたくしは　□です。（二人づつ立たせ、相對せしめて、「あなたは　□（○○）さんです。」と交互にいはせる。）
○一人の學習者を教壇に上らせ、指導者の

近くに立たせておき、學習者の全體に向かつて、

このかたは　□さんです。

といふ。特に「このかた」に力を入れ、注意させるやうに何遍も繰返していふ。

○このかたは　□さんですか。（一人一人に）

△はい、さうです。

○このかたは　□さんですか。

△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）

○黑板に、

コノカタワ

と書き、**コ・ノ・カ・タ・ワ**——**コノカタワ**と、何遍も繰返していふ。

△**コ・ノ・カ・タ・ワ**——**コノカタワ**（一齊に、また一人々々に）

○二人づつその席に立たせ、指導者に向かつて交互にいはせる。指導者も和して、

△わたくしは　□です。

このかたは　○○さんです。（一人々々に）

○一人の學習者を教壇に上らせ、學習者全體に向かつて、

このかたは　□さんですか。

といふ。

△はい、さうです。（一人々々に）

○壇上の學習者を指して、

このかたは　□さんです。

といひ、更に學習者の席の一人を指して、

そのかたは　○○さんです。

といふ。

○そのかたは　□さんですか。

△はい、さうです。（一人々々に）

○そのかたは　□さんですか。

△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）

○黑板に

ソノカタワ

と書き、**ソ・ノ・カ・タ・ワ**——**ソノカタワ**と、何遍も繰返していふ。

△**ソ・ノ・カ・タ・ワ**——**ソノカタワ**（一齊に、また一人々々に）

○そのかたは　□さんですか。

△はい、さうです。

○そのかたは　□さんですか。

△いゝえ、さうではありません。このかたは　○○さんです。（指導者も和して一人々々に）

○本を開かせ、繪畫を見させて、

コノカタワ　タナカサンデス。

といひ、**タ・ナ・カ・サ・ン**——**タナカサン**と何遍も繰返していふ。

△**タ・ナ・カ・サ・ン**——**タナカサン**（一齊に、また一人々々に）

○本の繪畫を見させて、

ソノカタワ　ヤマモトサンデス。

といひ、**ヤ・マ・モ・ト・サ・ン**——**ヤマモトサン**と何遍も繰返していふ。

△**ヤ・マ・モ・ト・サ・ン**——**ヤマモトサン**（一齊に、また一人々々に）

○このかたは　たなかさんです。

そのかたは　やまもとさんです。

△このかたは　たなかさんです。

そのかたは　やまもとさんです。（一人一人に）

3　總括

○このかたは　□さんですか。

△はい、さうです。（一人々々に）
○このかたは □さんですか。
△いゝえ、さうではありません（一人一人に）
○このかたは □さんですか、○○さんですか。
△そのかたは □さんです。（指導者も和して一人々々に）
○そのかたは □さんですか。
△はい、さうです。
○そのかたは □さんですか。
△いゝえ、さうではありません。
○そのかたは □さんですか、○○さんですか。
△このかたは □さんです。（指導者も和して一人々々に）

三　備　考

(一)　コノカタがコノカタに、ソノカタがソノカタに訛り易い。その點十分注意して指導することが必要である。

(二)　人を指す「このかたは」「そのかたは」は、物を指す「これは」「それは」と相關聯させて指導することも一つの方法である。

第十九課　（第十七頁）

一　教　材

アノカタワ　ドナタデスカ。
アノカタワ　ナカムラサンデス。

構文　語彙　アノカタ　ドナタ
符號

〔教具〕

二　指　導

(一)　要　領

1　前課の「このかた」「そのかた」と關聯させて「あのかた」を修得させ、使用範圍の廣い「どなた」を學習させて、問答を自由ならしめるのが本課の要領である。

2　支那語では「そのかた」も「あのかた」も「那位」であるから、この兩者の區別を理解さ

せることは相當困難であらう。先づ話手である「わたくし」と相手である「あなた」とを土臺として、第三人稱の中の區別であることを、用例を多くして會得させることが適當であらう。

(二)　問　答

1　復習

○あなたは□さんですか。

△はい、さうです。(一人々々に)

○あなたは□さんですか、○○さんですか。

△わたくしは□です。(一人々々に)

○そのかたは□さんですか。

△いゝえ、さうではありません、このかたは○○さんです。(一人々々に)

○このかたは□さんですか、○○さんですか。

△そのかたは□さんです。(一人々々に)

2　提示

○學習者の一人を教壇上に立たせ、このかたは□さんです。といひ、着席してゐる學習者の一人々々を教壇上から指して、そのかたは□さんです。とそれ〴〵にいふ。

指導者は教壇上から降り、教壇上の學習者を指して、あのかたは□さんです。といふ。

○このかたは□さんですか。

△はい、さうです。(一人々々に)

○そのかたは□さんですか。

△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)

○あのかたは□さんですか。(教壇上の學習者を指して)

△はい、さうです。(一人々々に)

○あのかたは□さんですか。(教壇上の學習者を指して)

△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)

○あのかたは□さんですか、○○さんですか。(教壇上の學習者を指して)

△あのかたは□さんです。(指導者も和して一人々々に)

○黑板に、

アノカタワ

と書き、**ア・ノ・カ・タ・ワ**——**アノカタワ**と、何遍も繰返していふ。

△**ア・ノ・カ・タ・ワ**——**アノカタワ**　(一齊に、また一人々々に)

○あのかたは□さんですか、○○さんですか。(指導者からも學習者からも離れた窓際に、學習者の一人を立たせて)

△あのかたは□さんです。(一人々々に)

○あのかたは　どなた　ですか。(「どなた」を特にはつきりいふ。)

△あのかたは□さんです。(一人々々に)

○黑板(**アノカタワ**の下)に、

ドナタデスカ

と書き、**ド・ナ・タ**——**ドナタ**と、何遍も繰返していふ。

△**ド・ナ・タ**——**ドナタ**　(一齊に、また一人一

人に)

○あのかたは　どなたですか。

△あのかたは　□さんです。

○黒板に、

アノカタワ　ナカムラサンデス

と書き、**ナ・カ・ム・ラ・サ・ン——ナカムラサン**

と、何遍も繰返していふ。

△**ナ・カ・ム・ラ・サ・ン——ナカムラサン**　(一齊に、また一人々々に)

○**アノカタワ　ドナタデスカ。**

アノカタワ　ナカムラサンデス。(黒板による。)

△**アノカタワ　ドナタデスカ。**

アノカタワ　ナカムラサンデス。(黒板による。)

○本を開かせて、

アノカタワ　ドナタデスカ。

アノカタワ　ナカムラサンデス。

△**アノカタワ　ドナタデスカ。**

アノカタワ　ナカムラサンデス。(一人一人に)

本を離れて、

○あなたは　どなたですか。

△わたくしは　□です。(一人々々に)

(3)　總括

○一人の學習者を教壇上に立たせて、このかたは　□さんです。といひ、その學習者を席に歸らせて、そのかたは　□さんです。といひ、更にその學習者を教壇からも學習者の席からも離れた場所に立たせて、あのかたは　□さんです。といふ。

○あなたは　どなたですか。

△わたくしは　□です。(一人々々に)

三　備　考

(一)　アノカタワが、アノカダワに訛り易い。その點を注意して指導する必要がある。

(二)　窓の外に人が見えたら、「あのかたはどなたですか。」といつて活用することが必要である。その答は得られないにしても、試みることが有效と思はれる。

第二十課（第十八頁）

一　教材

コレワ　ワタクシノ　ペンデス。
ソレワ　アナタノ　ペンデス。

構文　コレ／ソレ　ワ　ワタクシノ／アナタノ　○○デス。

語彙　ワタクシノ　アナタノ　ペン

符號　ペ

〔教具〕ペン・鉛筆・筆等。

二　指導

(一)　要領

1　構文は「これ／それは○○です。」を發展させたものであるから、その基礎的構文を十分に復習しておいて、これと關聯させて提示することが肝要である。

2　「わたくしの」「あなたの」といふやうな所有を表はす助詞「の」を學ばせるところに主眼がある。

(二)　問答

1　復習

○これはつくゑですか。
△はい、さうです。（一人々々に）
○それはこしかけですか。
△はい、さうです。（一人々々に）
○それはいすですか。（學習者の腰掛を指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○それはこしかけです。（一人々々に）
○これはほんですか。（教卓上のペンを指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○これはなんですか。（紙を揭げて）
△それはかみです。（一人々々に）
○それはかみですか。（學習者のペンを指して）
△いゝえ、さうではありません。（一人一人に）
○それはなんですか。
○これはほんです。（一人々々に）

2　提示

○これはほんです。
これはわたくしのほんです。（身振で自分の本であることを示すやうに

して)

それは　ほんです。

それは　あなたの　ほんです。(指で相手の本であることを示すやうにして)

以上數回繰返していふ。

○これは　わたくしの　ほんですか。

△はい、さうです。(一人々々に)

○それは　あなたの　ほんですか。

△はい、さうです。(一人々々に)

○これは　あなたの　ほんですか。

△いゝえ、さうではありません。

○それは　わたくしの　ほんですか。

△いゝえ、さうではありません。(一人一人に)

○これは　わたくしの　ほんですか、あなたの　ほんですか。

△それは　あなたの　ほんです。(指導者も和して一人々々に)

○それは　わたくしの　ほんですか、あなたの　ほんですか。

△これは　わたくしの　ほんです。(指導者も和して一人々々に)

○これは　なんですか。

△それは　ペンです。(一人々々に)

○それは　なんですか。

△これは　ペンです。(一人々々に)

○これは　あなたの　ペンですか、わたくしの　ペンですか。

△それは　あなたの　ペンです。(一人一人に)

○それは　あなたの　ペンですか、わたくしの　ペンですか。

△これは　わたくしの　ペンです。

○黒板に

コレワ　ワタクシノ　ペンデス

と書き、**ワ・タ・ク・シ・ノ——ワタクシノ**と、何遍も繰返していふ。

△**ワ・タ・ク・シ・ノ——ワタクシノ**　(一齊に、また一人々々に)

○**ペ・ン—ペン**と、何遍も繰返していふ。

△**ペ・ン—ペン**　(一齊に、また一人々々に)

○黒板に、

ソレワ　アナタノ　ペンデス

と書き**ア・ナ・タ・ノ—アナタノ**と、何遍も繰返していふ。

△**ア・ナ・タ・ノ—アナタノ**　(一齊に、また一人一人に)

本を開き、繪畫を見させ、符號をたどらせて、

コレワ　ワタクシノ　ペンデス。

ソレワ　アナタノ　ペンデス。

と何遍も繰返していふ。

△**コレワ　ワタクシノ　ペンデス。**

ソレワ　アナタノ　ペンデス。(一齊に、また一人々々に)

○本から離れて、

これは　なんですか。

△それは　ペンです。

○これは　わたくしの　ペンですか、あなたの　ペンですか。

△それは　あなたの　ペンです。(一人一人に)

○それは　あなたの　ペンですか、わたくしの　ペンですか。

△これは　わたくしの　ペンです。(一人一人に)

3　總括

○黒板に、

コレ／ソレ　ワ　ノ　〇〇デス
ワタクシ／アナタ

と書き、それに即して「ほん」「かみ」「つくゑ」「いす」「こしかけ」「ペン」「インキ」「えんぴつ」などにつき、活用練習する。

三　備　考

(一)　ワタクシがワダクシにならぬやう、アタナがアナダにならぬやう注意を要する。

(二)　既習の「わたくし」「あなた」を基礎として、その所有格を學ばせるといふ心構へで指導すれば、自然に理解せられるであらう。「せんせいの」「せいとの」などを用ひて練習することも、適當な指導の一端であらう。

第二十一課　（第十九頁）

一　教　材

コレワ　アナタノ　エンピツデスカ。
イーエ、ソーデワアリマセン。
サトーサンノ　エンピツデス。

構文

語彙　エンピツ

符號　ピ

〔教具〕　ペン・鉛筆・筆等。

二　指　導

(一)　要　領

1　教材は前課の擴張で、第一人稱・第二人稱に附いた所有を表はす助詞「の」が、第三

人稱にも附くものであること及び否定の答に續いて補足的說明を加へる問答形式を學ばせることが主眼である。

2　復習を十分にし、復習の間に、知らず識らず新敎材が修得せられるやうに進行させることが指導の要領であらう。

(二)　問答

1　復習

○これは　ペンです。
　これは　えんぴつです。
　數回反復。
○これは　なんですか。
△それは　えんぴつです。(一人々々に)
○それは　なんですか。
△これは　えんぴつです。(一人々々に)
○これは　わたくしの　えんぴつです。
(自分の鉛筆を高く揭げ示して)
　それは　あなたの　えんぴつです。(學習者の鉛筆を指して)
　數回反復。
　それは　あなたの　えんぴつですか。
△はい、さうです。(一人々々に)
○これは　わたくしの　えんぴつですか。
△はい、さうです。

2　提示

○これは　あなたの　えんぴつですか。
△いいえ、さうではありません。(一人一人に)
○それは　わたくしの　えんぴつですか。
△いいえ、さうではありません。(一人一人に)
○これは　あなたの　えんぴつですか、
　わたくしの　えんぴつですか。

△それは　あなたの　えんぴつです。(一人一人に)
○これは　□さんの　えんぴつですか。
△はい、さうです。(一人々々に)
○これは　あなたの　えんぴつですか。
△いいえ、さうではありません。
○□さんの　えんぴつですか。
△はい、さうです。
○これは　あなたの　えんぴつですか。
△いいえ、さうではありません。□さんの　えんぴつです。(指導者も和して一人々々に)
○それは　わたくしの　えんぴつですか。
△いいえ、さうではありません。□さんの　えんぴつです。(指導者も和して一人々々に)
○黑板に、

エンピツ

と書き、**エ・ン・ピ・ツ**——**エンピツ**と、何遍も繰返していふ。

△**エ・ン・ピ・ツ**——**エンピツ**　(一齊に、また一人々々に)

○黑板(**エンピツ**の上)に、

サトーサンノ

と書き、**サ・ト・ー・サ・ン・ノ**——**サトーサンノ**と、何遍も繰返していふ。

△**サ・ト・ー・サ・ン・ノ**——**サトーサンノ**　(一人一人に)

○さとうさんの　えんぴつ。
△さとうさんの　えんぴつ。(一齊に、また一人々々に)
○本を開かせて、

コレワ　アナタノ　エンピツデスカ。
イーエ、ソーデワアリマセン。

サトーサンノ　エンピツデス。
△コレワ　アナタノ　エンピツデスカ。
イーエ、ソーデワアリマセン。
サトーサンノ　エンピツデス。（一人一人に）

本を離れて

○それは　わたくしの　えんぴつですか。
△いゝえ、さうではありません。□さんの　えんぴつです。（一人々々に）

3　總括

○それは　□さんの　えんぴつですか。
△いゝえ、さうではありません。せんせいの　えんぴつです。（指導者も和して一人々々に）
○これは　□さんの　ペンですか。
△いゝえ、さうではありません。せんせいの　ペンです。（指導者も和して一人一人に）
○これは　□さんの　えんぴつですか、○○さんの　えんぴつです。
△それは　□さんの　えんぴつです。
○それは　□さんの　ペンですか、○○さんの　ペンですか。
△これは　□さんの　ペンです。

三　備　考

(一)　所有を表はす助詞「の」が、第三人稱に附く場合を、できるだけ多く練習させる。
(二)　否定の答に續いて、それの補足的な説明が添はつた構文としては、第十五頁を復習してからこの教材を提示するのも一つの方法である。

第二十二課　（第二十頁）

一　教　材

ソレワ　ドナタノ　フデデスカ。
コレワ　ワタクシノ　フデデス。

構文

語彙　**フデ**

符號　**フ**

〔教具〕筆・ペン・鉛筆・本等。

二　指　導

(一)　要　領

1　「どなた」といふ疑問代名詞に、所有を表はす助詞「の」の附いた言葉を學ばせるのが主眼である。

2　疑問を表はす「なに」「どなた」の用法を復習し、また所有を表はす「わたくしの」「あなたの」「□さんの」等を練習し、「どなたの○

○を學習させれば、困難なく理解せられるであらう。

(二)　問　答

1　復習

○これは　なんですか。
△それは　ペンです。(一人々々に)
○それは　なんですか。
△これは　えんぴつです。(一人々々に)
○これは　なんですか。
△それは　ふでです。(指導者も和して一人一人に)
○これは　わたくしの　ふでですか。
△はい、さうです。(一人々々に)
○これは　あなたの　ふでですか。
△いいえ、さうではありません。それはせんせいの　ふでです。(指導者も和して一人々々に)
○このかたは　どなたですか。
△そのかたは　□さんです。(一人々々に)
○そのかたは　どなたですか。
△このかたは　□さんです。(一人々々に)
○あのかたは　どなたですか。
△あのかたは　□さんです。(一人々々に)

2　提示

○これは　ペンですか、えんぴつですか。
△それは　ぺんです。(一人々々に)
○これは　ペンですか、ふでですか。
△それは　ふでです。(一人々々に)
○これは　あなたの　ふでですか。
△いいえ、さうではありません、せんせいの　ふでです。(指導者も和して一人々々に)

○それは　□さんの　ふでですか、○○さんの　ふでですか。
△これは　□さんの　ふでです。
○それは　どなたの　ふでですか。
△これは　わたくしの　ふでです。(一人一人に)
○黒板に、
ソレワ　ドナタノ　フデデスカ
と書き、**ド・ナ・タ・ノ——ドナタノ**と、何遍も繰返していふ。
△**ド・ナ・タ・ノ——ドナタノ**　(一齊に、また一人一人に)
○黒板に、
コレワ　ワタクシノ　フデデス
と書き、**ワ・タ・ク・シ・ノ・フ・デ——ワタクシノフデ**と、何遍も繰返していふ。
△**ワ・タ・ク・シ・ノ・フ・デ——ワタクシノ　フデ**　(一人々々に)
○それは　どなたの　ふでですか。
これは　わたくしの　ふでです。
數回反復。
△それは　どなたの　ふでですか。
これは　わたくしの　ふでです。(一人一人に)
○本を開かせて、
ソレワ　ドナタノ　フデデスカ。
コレワ　ワタクシノ　フデデス。
△**ソレワ　ドナタノ　フデデスカ。**
コレワ　ワタクシノ　フデデス。(一人一人に)
○本を離れて、
これは　どなたの　ほんですか。
△それは　□さんの　ほんです。

○それは　どなたの　ふでですか。
△これは　わたくしの　ふでです。

3　總括

○このかたは　どなたですか。
△そのかたは　□さんです。（一人々々に）
○そのかたは　どなたですか。
△このかたは　□さんです。（一人々々に）
○あのかたは　どなたですか。
△あのかたは　□さんです。（一人々々に）
○これは　どなたの　ペンですか。
△それは　□さんの　ペンです。
○それは　どなたの　えんぴつですか。
△これは　わたくしの　えんぴつです。
○それは　どなたの　ふでですか。
△これは　せんせいの　ふでです。

三　備　考

(一)　ドナタのドがトに、ワタクシノのタがダに訛り易い。

(二)　「これ（それ、あれ）は○○です。」といふ構文とその變化に熟し、代名詞または名詞に所有を表はす「の」の添はつた言葉にも大分馴れて來たはずであるから、學習者を二人立たせて問答させることも、加へ得れば加へて練習させたい。

第二十三課　（第二十一頁）

一　教　材

アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。
アレワ　タナカサンノデス。

構文　**アレワ　○○ノデス。**
語彙　**ボーシ　○○ノデス**
符號　**ボ**

〔教具〕

二　指　導

(一)　要　領

1　代名詞または名詞に添つて所有を表はす「の」の學習から進んで、同じく代名詞

または名詞に添つて「の何々」といふやうに所有する物を含めて表はす「の」を學習させることが眼目である。

2　「○○は○○です。」といふ構文とその變化に成る構文は、この課を以て一應學習を完結させるわけであるから、相當自由に問答ができるやうに導きたい。

(一)　問　答

1　復習

○それは　あなたの　ほんですか。
△はい、　さうです。（一人々々に）
○これは　あなたの　えんぴつですか。
△いいえ、　さうではありません。（せんせいの　えんぴつです。（一人々々に）
○それは　□さんの　ペンですか。
△いゝえ、　さうではありません。□さんの　ペンです。（一人々々に）

2　提示

○これは　なんですか。
△それは　ペンです。（一人々々に）
○これは　どなたの　ペンですか。
△それは　せんせいの　ペンです。（一人一人に）
○それは　なんですか。
△これは　えんぴつです。（一人々々に）
○それは　どなたの　えんぴつですか。
△これは　わたくしの　えんぴつです。（一人々々に）
○あれは　なんですか。
△あれは　ばうしです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○あれは　どなたの　ばうしですか。

△あれは　□さんの　ばうしです。（一人一人に）
○黑板に、
アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ
と書き、**ボー・シ—ボーシ**と、何遍も繰返していふ。
△**ボー・シ—ボーシ**（一齊に、また一人々々に）
○**アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。**
△**アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。**（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○黑板に、
アレワ　□サンノ　ボーシデス
と書き、**アレワ　□サンノ　ボーシデス**
と何遍もいふ。
△**アレワ　□サンノ　ボーシデス。**（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○**アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。**
アレワ　□サンノ　ボーシデス。
△**アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。**
アレワ　□サンノ　ボーシデス。（一人一人に）
○黑板を離れて、
これは　どなたの　えんぴつですか。（自問）
これは　わたくしのです。（自答）
それは　どなたの　ペンですか。（自問）
それは　□さんのです。（自答）
あれは　どなたの　ばうしですか。（自問）
あれは　□さんのです。（自答）
數回反復。
○それは　どなたの　えんぴつですか。
△これは　わたくしのです。（指導者も和

して一齊に、また一人々々に)

○これは　どなたの　ばうしですか。

△それは　□さんのです。(一人々々に)

○本を開かせて、繪畫を指しながら、

アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。

アレワ　タナカサンノデス。

△**アレワ　ドナタノ　ボーシデスカ。**

アレワ　タナカサンノデス。

○本を離れて、

あれは　なんですか。(指導者からも學習者からも離れた窓に、指導者の帽子をおいて)

△あれは　ばうしです。

○あれは　どなたの　ばうしですか。

△あれは　せんせいのです。(指導者も和して一齊に、また一人々々に)

3　總括

○これは　あなたの　えんぴつですか。

△いゝえ、さうではありません。□さんのです。(一人々々に)

○それは　どなたの　ふでですか。

△これは　わたくしのです。(一人々々に)

○あれは　どなたの　ばうしですか。

△あれは　□さんのです。(一人々々に)

三　備　考

(一)　ボーシがボシになり易い學習者があるかも知れない。

(二)　またボとボの區別を、はつきりさせるやうに留意して指導することが必要と思はれる。

(三)　「○○は○○です。」とその變化に成る構文が一應完結したところであるから、總復習の計畫案を立て、それを試みることはよい練習になるであらう。

第二十四課　（第二十二頁）

一　教材

ココニ　スズリガ　アリマス。
ココニ　スミガ　アリマス。

構文　**○○ニ　○○ガ　アリマス。**

語彙　**ココ　ニ　スズリ　ガ　アリマス　スミ**

符號　**ニ　ズ　ガ**

〔教具〕硯・墨・筆・紙・鉛筆等。

二　指導

(一)　要領

1　存在を言表はす構文、いはゆる「あります型」の學習である。生物や自動作用を具へたものの場合に用ひる「ゐます」と區別して用ひるべきである。

2　場所を示す助詞「に」及び主語を表はす助詞「が」の用法を十分會得させることが必要である。

3　語彙の數を多く學ばせるよりも、構文によく馴れさせ、應用を自在ならしめることが、語學修得の要訣である。

4　第二十二頁から第二十六頁までの存在の言葉のいひ方の發展を豫め理解しておいて、關聯的に學習させることが肝要である。

5　第七課の聽方教材の一部分を復習することによつて導くことが、適當な入り方であらう。

(二)　問答

1　復習

○これは　なんですか。

△かみです。（一人々々に）

○それは　なんですか。

△ほんです。（一人々々に）

○あれは　なんですか。

△ばうしです。（一人々々に）

2　提示

○これは　なんですか。

△すゞりです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　なんですか。

△すみです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○黑板に、

スズリ

と書き、**ス・ズ・リ**——**スズリ**と、何遍も繰返していふ。

スミ

と書き、**スミ**——**スミ**と、何遍も繰返していふ。

△**スズリ**——**スズリ**（一齊に、また一人一人に）

スミ——**スミ**（同前）

○これは　どなたの　すゞりですか。（右手に高く掲げて）

△せんせいの　すゞりです。（一人々々に）

○これは　どなたの　すみですか。（左手に高く掲げて）

△せんせいの　すみです。（一人々々に）

○硯を高く掲げて、

これは　すゞりです。

といひ、硯を卓上において、

こゝに　すゞりが　あります。

墨を高く掲げて、

これは　すみです。

といひ、墨を卓上において

こゝに　すみがあります。

といふ。

以上數回反復。

○これは　なんですか。（硯を高く掲げて）

△それは　すゞりです。

○こゝに　なにか　ありますか。（硯を卓上において）

△すゞりが　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　なんですか。（墨を高く掲げて）

△それは　すみです。

○こゝに　なにが　ありますか。（墨を卓上において）

△すみが　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○本を開かせ、

ココニ　スズリガ　アリマス。

ココニ　スミガ　アリマス。

△**ココニ　スズリガ　アリマス。**

ココニ　スミガ　アリマス。（一人々々に）

○本を離れて、

こゝに　なにが　ありますか。（卓上に本をおいて）

△ほんが　あります。（一人々々に）

○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に筆をおいて）

△ふでが　あります。一人々々に）

○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に鉛筆をおいて）

△えんぴつが　あります。（一人々々に

○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に硯をおいて）一人々々に）

△すゞりが　あります。

○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に墨をおいて）

△すみが　あります。一人々々に）

3　總括

○こゝに　なにが　ありますか。

△えんぴつが　あります。（一人々々に）

○どなたの　えんぴつですか。

△□さんの　えんぴつです。（一人々々に）

○こゝに　すゞりが　ありますか。

△はい、あります。（指導者も和して、一齊に、また一人々々に）

○こゝに　すみが　ありますか。

△はい、あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○こゝに　わたくしの　すゞりが　あり

ますか。

△はい、あります。（一人々々に）

○こゝに　わたくしの　すみが　ありますか。

△はい、あります。（一人々々に）

三　備　考

(一)　助詞ガはngaであるから、ホンガアリマスを練習してそれに馴れさせるのは、適切な指導であらう。

(二)　既に學習した語彙を用ひて「こゝに○○があります。」の構文を十分練習させる。なほ助詞の「は」と「が」の區別に注意させることが大切である。大體からいへば、「が」は主語を強調し、「は」は述語を強調するけれども、説明よりも用例に注意させることが必要と思はれる。

(三)　便宜上、

こゝに　なにが　ありますか。

○○が　あります。

の如き構文として練習させることも適當な方法の一つであらう。

第二十五課　（第二十三頁）

一　教　材

ソコニ　チャワンガ　アリマスカ。

ハイ　アリマス。

アソコニ　ナニガ　アリマスカ。

ドビント　チャワンガ　アリマス。

構文　ソコ、アソコ　ニ　ナニガ　アリマスカ。

○○ト　○○ガ　アリマス。

語彙　ソコ　チャワン　アソコ　ナニ　ドビン　ト（助詞）

符號　チャ　ビ

〔教具〕茶碗・土瓶・帽子・ペン・鉛筆・本等。

二　指　導

(一) 要　領

1　前課が「ありますか型」を學ばせ、兼ねて「こゝに」といふ場所の代名詞から進んで、「そこに」「あそこに」を學ばせ、「〇〇が」から進んで「なにが」を學ばせるところに本課の主眼がある。「〇〇と〇〇」を始めて學ばせることも新しい課程である。

2　聽方學習を主とした第七課の復習から、本課の指導に入るのが、適當な指導法である。

3　前課は「ります型」を「です型」と區別させるところに主眼があつたが、本課はそれを基礎として、問答を展開させるところに指導の眼目がある。

(二) 問　答

1　復習

〇これは　なんですか。(鉛筆を揭げて)
△それは　えんぴつです。(一人々々に)
〇こゝに　なにが　ありますか。(鉛筆を卓上において)
△えんぴつが　あります。(一人々々に)
〇これは　なんですか。(ペンを揭げて)
△それは　ペンです。(一人々々に)
〇こゝに　なにが　ありますか。(ペンを卓上において)
△ペンが　あります。(一人々々に)

その他。

2　提示

〇これは　ちゃわんです。(茶碗を揭げて)
〇黒板に、

チャワン

と書き、**チャ・ワ・ン**——**チャワン**と、何遍も繰返していふ。

△**チャ・ワン**——**チャワン**　(一齊に、また一人一人に)
〇これは　なんですか。(茶碗を揭げて)
△それは　ちゃわんです。(一人々々に)
〇こゝに　なにが　ありますか。(茶碗を卓上において)
△ちゃわんが　あります。(一人々々に)
〇これは　どびんです。(土瓶を揭げて)

黒板に、

ドビン

と書き、**ド・ビ・ン**——**ドビン**と、何遍も繰返していふ。

△**ド・ビ・ン**——**ドビン**　(一齊に、また一人一人に)
〇これは　なんですか。(土瓶を揭げて)
△それは　どびんです。(一人々々に)
〇こゝに　なにが　ありますか。(土瓶を卓上において)
△どびんが　あります。(一人々々に)
〇それは　なんですか。(机の上の帽子を指して)
△これは　ぼうしです。(一人々々に)
〇そこに　ぼうしが　ありますか。(机の上を指して)
△はい、　あります。(一人々々に)
〇そこに　ペンが　ありますか。
△はい、　あります。(一人々々に)
〇そこに　ちゃわんが　ありますか。(茶碗を机の上に移して)
△はい、　あります。(茶碗を移動して一人一人に)

○そこに　どびんが　ありますか。(土瓶を机の上に移して)

△はい、あります。(土瓶を移動して一人一人に)

○あれは　なんですか。(窓のあたりに帽子をおいて)

△あれは　ばうしです。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ありますか。(窓のあたりを指して)

△ばうしが　あります。(一人々々に)

○こゝに　ペンが　あります。(卓上にペンをおいて)

そこに　ペンが　あります。(學習者の机の上にペンをおいて)

あそこに　ペンが　あります。(窓のあたりにペンをおいて)

○あそこに　ペンが　ありますか。(窓のあたりのペンを指して)

△はい、あります。(一人々々に)

○あそこに　ばうしが　ありますか。(窓のあたりに帽子をおいて)

△はい、あります。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ありますか。(窓のあたりに茶碗をおいて)

△ちゃわんが　あります。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ありますか。(窓のあたりに土瓶をおいて)

△どびんが　あります。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ありますか。(窓のあたりの土瓶を指して)

△ちゃわんと　どびんが　あります。(指導者も和して、一人々々に)

○本を開いて、

ソコニ　チャワンガ　アリマスカ

ハイ、アリマス。

アソコニ　ナニガ　アリマスカ。

ドビント　チャワンガ　アリマス。

と何遍も繰返していふ。

△**ソコニ　チャワンガ　アリマスカ。**

ハイ、アリマス。

アソコニ　ナニガ　アリマスカ。

ドビント　チャワンガ　アリマス。(一人一人に)

本を離れて、

○こゝに　なにが　ありますか。(土瓶と茶碗とを卓上に移して)

△ちゃわんと　どびんが　あります。(一人一人に)

3　總括

○こゝに　なにが　ありますか。(卓上の帽子を指して)

△ばうしが　あります。(一人々々に)

○そこに　なにが　ありますか。(机の上の鉛筆を指して)

△えんぴつが　あります。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ありますか。(窓のあたりの茶碗を指して)

△ちゃわんが　あります。(一人々々に)

○こゝに　なにが　ありますか。(卓上の鉛筆とペンを指して)

△えんぴつと　ペンが　あります。(一人一人に)

○こゝに　なにが　ありますか。(卓上の帽子と本を指して)

△ばうしと　ほんが　あります。(一人一人に)

○そこに　ペンと　えんぴつが　ありますか。(机の上の鉛筆とペンとを指して)

△はい、あります。（一人々々に）
○あそこに　ばうしと　ペンが　ありますか。
△はい、あります。（一人々々に）

三　備　考

(一)　ドビンのドがトに訛り易い。この點に注意して指導することが必要である。
(二)　構文に於ける「です型」と「あります型」との區別をはつきりさせることは、この課に於ても、まだ十分注意して行はなくてはならないであらう。
(三)　練習問答がいくらもできる程度になつてゐるはず故、教室内のものを用ひ、または身體の各部の名稱を用ひて、十分練習を積ませることが肝要である。

第二十六課　（第二十四頁）

一　教　材

ソコニ　ハシガ　アリマスカ。
ハイ、アリマス。
サジモ　アリマスカ。
イーエ、アリマセン。
構文　〇〇モ　アリマスカ。
イーエ、アリマセン。
語彙　ハシ　サジ　モ（助詞）
符號　ジ
〔教具〕　箸・匙・茶碗・土瓶・ペン・鉛筆・帽子・本等。

二　指　導

(一)　要　領

1　「〇〇がありますか。」といふ問に對する「はい、あります。」「いゝえ、ありません。」といふ兩樣の答へ方を修得させ、兼ねて「〇〇も」といふ「も」の用法を學ばせることが主眼である。

2　食卓問答の一端である「はし」「さじ」といふやうな語彙を修得させるとともに、食器に關するその他の語彙を補つて聽かせることも、適當な指導であらう。

3　補充語として「どこに」も學習させておくことが便宜であらう。

(二)　問　答

1　復習

〇そこに　なにが　ありますか。
△ほんが　あります。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。
△えんぴつが　あります。（一人々々に）
〇あそこに　なにが　ありますか。
△ばうしが　あります。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。（卓上に鉛筆とペンをおき、これを指して）
△えんぴつと　ペンが　あります。（一人一人に）
〇これは　なんですか。
△それは　ちゃわんです。（一人々々に）
〇これは　なんですか。
△それは　どびんです。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。（土瓶と茶碗を指して）
△どびんと　ちゃわんが　あります。（一人一人に）

2　提示

〇これは　なんですか。（箸を揭げて）
△それは　はしです。（一人々々に）
〇これは　なんですか。（匙を揭げて）
△それは　さじです。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。（箸を卓上において）
△はしが　あります。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。（匙を卓上において）
△さじが　あります。（一人々々に）
〇黑板に、

ハシ

と書いて、**ハ・シ**——**ハシ**と、何遍も繰返していふ。アクセントに注意して。
△**ハ・シ**—**ハシ**（一齊に、また一人々々に）
〇黑板に、

サジ

と書き、**サ・ジ**——**サジ**と、何遍も繰返していふ。
△**サ・ジ**——**サジ**（一齊に、また一人々々に）
〇そこに　はしが　ありますか。（箸を學習者の机に移して）
△はい、あります。（一人々々に）
〇そこに　さじが　ありますか。（匙を學習者の机に移して）
△はい、あります。（一人々々に）
〇そこに　はしが　ありますか。
△はい、あります。（一人々々に）
〇さじも　ありますか。
△はい、あります。（一人々々に）

○そこに　はしが　ありますか。（箸だけをおき、匙を持來つて）
△はい、あります。（一人々々に）
○さじも　ありますか。
△いゝえ、ありません。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○本を開かせて、數回いふ。
△一人々々にいはせる。
○本を離れて、
そこに　さじが　ありますか。
△いゝえ、ありません。（一人々々に）
○そこに　はしが　ありますか。
△はい、あります。（一人々々に）
○そこに　さじが　ありますか。（匙を學習者の机の上におき、箸を持來つて）
△はい、あります。（一人々々に）
○はしも　ありますか。
△いゝえ、ありません。（一人々々に）

3　總括

○そこに　はしと　さじが　ありますか。
△はい、あります。（一人々々に）
○そこに　はしが　ありますか。（箸を窓の所に移して）
△いゝえ、ありません。（一人々々に）
○どこに　ありますか。（移した箸のありかを尋ねて）
△あそこに　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○さじが　ありますか。（匙を學習者の机の上に移して）
△はい、あります。（一人々々に）
○どこに　ありますか。（匙の所在を尋ねる。）
△こゝに　あります。（指導者も和して一

人一人に）
○そこに　はしが　ありますか。
△いゝえ、ありません。（一人々々に）
○どこに　ありますか。
△そこに　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

三　備　考

(一)　ハシ（箸）のアクセントがハにあることを注意して指導し、なほそれがシにあれば橋になることを知らしめることが必要である。

(二)　補充語としての「どこ」は相當に難解かと思はれるが、「なに」「どなた」を學習した關係上、學習させておくのが當然であらう。

(三)　助詞の「と」「も」もなるべく多く練習させ、それによつて意味を理解させたい。

第二十七課　（第二十五頁）

一　教材

リンゴガ　アリマス。
ヒトツ　フタツ　ミッツ　ヨッツ　イツツ、
イツツ　アリマス。

構文　**ヒトツ　フタツ　ミッツ　ヨッツ　イツツ、**
イツツ　アリマス。

語彙　**リンゴ　ヒトツ　フタツ　ミッツ　ヨッツ　イツツ**

符號　**ゴ　ヒ　ツ**（促音をあらはすもの）**ヨ**

〔教具〕　苹果（りんご）五箇、苹果の畫、小石（なるべく同じ大きさのもの）・碁石。
その他一つ二つといつて數へるに都合のよいもの。

二　指導

(一)　要領

1　五つまでの數へ方を修得させることが主眼である。

2　活用の力を養ふために、十分練習をさせる工夫が肝要である。

3　一つ二つ三つと數へる序數詞と、その結果を三つと判斷する場合の量數詞との區別を、はつきりつけていはせる指導が必要である。

(二)　指導

1　復習

○こゝに　なにが　ありますか。
△えんぴつが　あります。
○そこに　なにが　ありますか。
△ペンが　あります。
○あそこに　なにが　ありますか。
△ばうし（ボー）が　あります。
○こゝに　なにが　ありますか。
△ほんが　あります。
○そこに　なにが　ありますか。
△ばうしが　あります。
○どこに　ばうしが　ありますか。
△こゝに　あります。

2　提示

○これは（ワ）　なんですか。
△こいしです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○こゝに　なにが　ありますか。
△こいしが　あります。（一人々々に）
○小石を手にして、
ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ
いつゝ。

といつて、一箇づつ竝べて五つまでの數へ方を何遍も繰返す。

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ。（指導者も和して、その通りに小石を數へる。）

○碁石を手にして、これは　なんですか。

△ごいしです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○こゝに　なにが　ありますか。

△ごいしが　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ。（數へながら）

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ。（一齊に、また一人々々に）

○こゝに　なにが　ありますか。

△りんごが　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○こゝに　なにが　ありますか。

△りんごが　あります。

○いくつ　ありますか。

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ、いつゝ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○こゝに　こいしが　あります。いくつありますか。

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ、いつゝ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○こゝに　ごいしが　あります。いくつありますか。

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ、いつゝ　あります。（一齊に、また一人一人に）

○苹果を一つ取つて卓上におき、

△ひとつ　といはせ、

○黑板に　**ヒトツ**　と書き、

△**ヒトツ**　といはせる。

○苹果をもう一つ取つて卓上に竝べ、

△ふたつ　といはせ、

○黑板に　**フタツ**　と書き、

△**フタツ**　といはせる。

○苹果をもう一つ取つて卓上に竝べ、

△みっつ　といはせ、

○黑板に　**ミッツ**　と書き、

△**ミッツ**　といはせる。

○苹果をもう一つ取つて卓上に竝べ、

△よっつ　といはせ、

○黑板に　**ヨッツ**

と書き、

△**ヨッツ**

といはせる。

○苹果をもう一つ取つて卓上に竝べ、

△いつゝ

といはせ、

○黒板に

イツツ

と書き、

△**イツツ**

といはせる。

3　總括

○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に　おいた二つの碁石を指して）

△ごいしが　あります。

○いくつ　ありますか。

△ひとつ　ふたつ、ふたつ　あります。

○いくつ　ありますか。（碁石の數を三つにして）

△ひとつ　ふたつ　みっつ、みっつ　あります。

○いくつ　ありますか。（碁石の數を四つにして）

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ、よっつ　あります。

○いくつ　ありますか。（碁石の數を五つにして）

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ、いつゝ　あります。

三　備　考

(一)　數へ方は應用が廣い言葉であるから、一語一語發音を正確に練習させることが肝要である。

(二)　同じ數へ方でも、物を變へて練習すれば、興味を新たにするものである。興味を覺えさせながら、緊張して反復練習をさせることが必要である。

(三)　序數詞としての「ひとつ――いつゝ」と、量數詞としての「ひとつ――いつゝ」との區別がはつきりするやうに練習させることが必要であらう。

第二十八課　（第二十六頁）

一　教材

オーキイ　リンゴガ　イツツ　アリマス。
チーサイ　リンゴガ　イツツ　アリマス。
ミンナデ　イクツ　アリマスカ。
構文　オーキイ〇〇ガ　〇〇　アリマス。
チーサイ〇〇ガ　〇〇　アリマス。
ミンナデ　イクツ　アリマスカ。
語彙　オーキイ　チーサイ　ミンナ　デ（助詞）　イクツ
符號　オ　キ　チ
〔教具〕　苹果　大五箇　小五箇・茶碗　大五箇。小五箇

二　指導

(一)　要領

1　「おほきい」「ちひさい」といふ形容詞の用法、「いくつ」「いつゝ」のやうな副詞的修飾語に用ひられた數詞の用法及び「みんなで」といふ副詞の用法等を學習させることが主眼である。

2　形は三つの單文であるけれども、意味は密接な關聯を保つてゐる。その手心で取扱ふことが、指導上必要と思はれる。

3　學習事項が相當多いから、他の例を擧げて練習を十分ならしめることが肝要である。

(二)　問答

1　復習

〇こゝに　なにが　ありますか。（卓上の一箇の苹果を指して）
△りんごが　あります。（一人々々に）
〇いくつ　ありますか。（卓上の一箇の苹果を指して）
△ひとつ　あります。（一人々々に）
〇いくつ　ありますか。（二箇にして）
△ふたつ　あります。（一人々々に）
〇いくつ　ありますか。（三箇にして）
△みっつ　あります。（一人々々に）
〇いくつ　ありますか。（四箇にして）
△よっつ　あります。（一人々々に）
〇いくつ　ありますか。（五箇にして）
△いつゝ　あります。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。（苹果の代りに卓上に五箇の碁石をおいて）

△ごいしが　あります。（一人々々に）
○いくつ　ありますか。
△いつゝ　あります。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ありますか。（小石を五箇卓上に竝べて）
△こいしが　あります。（一人々々に）
○いくつ　ありますか。
△いつゝ　あります。（一人々々に）

2　提示

○これは（ワ）　なんですか。（大きい苹果を揭げて）
△りんごです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（小さい苹果を揭げて）
△りんごです。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に大きい苹果を五つ竝べて）
△りんごが　あります。（一人々々に）
○いくつ　ありますか。（卓上の大きい苹果五つを指して）
△いつゝ　あります。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ありますか。（卓上に小さい苹果を五つ竝べて）
△りんごが　あります。（一人々々に）
○いくつ　ありますか。（卓上の小さい苹果五つを指して）
△いつゝ　あります。
○卓上の大きい苹果を一つ取上げてこれは　おほきい（オーキー）　りんごです。
○小さい苹果を一つ取上げて、これは　ちひさい（チーサイ）　りんごです。
といふ。數回反復した後、これは
といひながら、大きい苹果を一つ取上げて、尋ねる身振をする。
△おほきい　りんごです。（一人々々に）
○これは
といひながら、小さい苹果を一つ取上げて、尋ねる身振をする。
△ちひさい　りんごです。（一人々々に）
○こゝに　おほきい　りんごが　ありますか。
△いつゝ　あります。（一人々々に）
○こゝに　ちひさい　りんごが　ありますか。
△いつゝ　あります。（一人々々に）
○おほきい　りんごが　いくつ　ありますか。
△おほきい　りんごが　いつゝ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人一人に）
○ちひさい　りんごが　いくつ　ありますか。
△ちひさい　りんごが　いつゝ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人一人に）
○みんなで　いくつ　ありますか。（大きい苹果と小さい苹果とを一緒にした總數の意味を身振を以て示しながら）
△とを（トー）　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○本を開いて繪畫を見ながら、符號をたどつて、一語々々はつきりするやうにいふ。
△符號をたどつて一語々々はつきりいはせる。（指導者も和して一齊に、また一人一人に）
○これは　なんですか。（大きい茶碗を五つ竝べて）

△ちゃわんです。（一人々々に）
○いくつ　ありますか。
△いつゝ　あります。（一人々々に）
○これは　なんですか。（小さい茶碗を五つ竝べて）
△ちゃわんです。（一人々々に）
○いくつ　ありますか。
△いつゝ　あります。（一人々々に）
○おほきい　ちゃわんが　いくつ　ありますか。（大きい茶碗を三つにして）
△おほきい　ちゃわんが　みっつ　あります。（一人々々に）
○ちひさい　ちゃわんが　いくつ　ありますか。（小さい茶碗を二つにして）
△ふたつ　あります。（一人々々に）
○みんなで　いくつ　ありますか。（兩方をまとめるやうな恰好を示して）
△いつゝ　あります。（一人々々に）

3　總括

○おほきい　ちゃわんが　いつゝ　あります。
ちひさい　ちゃわんが　ひとつ　あります。
みんなで　いくつ　ありますか。
△むっつ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○おほきい　ちゃわんが　いつゝ　あります。
ちひさい　ちゃわんが　ふたつ　あります。
みんなで　いくつ　ありますか。
△なゝつ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○おほきい　ちゃわんが　いつゝ　あります。
ちひさい　ちゃわんが　みっつ　あります。
みんなで　いくつ　ありますか。
△やっつ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○おほきい　ちゃわんが　いつゝ　あります。
ちひさい　ちゃわんが　よっつ　あります。
みんなで　いくつ　ありますか。
△こゝのつ　あります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

三　備　考

(一)　オーキイのキがチに訛り易い。またチーサイのチをキに訛る者もあるかも知れない。注意して正しく發音させ、練習させることが肝要である。

(二)　「みんなでいくつありますか。」は前提があつて始めて發せられる問であることを念頭において、その前提との關係を確實にたどらせることが大切な指導である。

第二十九課　（第二十七頁）

一　教材

ソコニ　ウシガ　イマス。
アソコニ　ンマガ　イマス。
構文　〇〇ニ　〇〇ガ　イマス。
語彙　ウシ　ンマ　イ（マス）
符號　ウ
〔教具〕牛と馬のゐる掛圖。
犬と猫のゐる掛圖。
鶏と家鴨のゐる掛圖。

二　指導

(一)　要領

1　第八課聽方教材の復習から、〇〇に〇〇がゐます。を聽き、且話すことができるやうに指導するのが本課の要領である。

2　指定型に對して存在型であることはいふまでもないが、存在型の中でも、ありますの類と區別して用ひられることを、よく會得させ、練習させたい。

3　掛圖類または黒板上の略畫を用ひて、學習者の經驗し易い生物に關して、なるべく多く言表させることが肝要である。

(二)　問答

1　復習

〇これは　なんですか。（白墨を掲げて）
△はくぼくです。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ありますか。（卓上に白墨をおいて）
△はくぼくが　あります。（一人々々に）
〇そこに　なにが　ありますか。
△えんぴつが　あります。（一人々々に）
〇あそこに　なにが　ありますか。
△ばうしが　あります。（一人々々に）
〇これは　なんですか。（掛圖を指して）
△それは　うしです。（一人々々に）
〇これは　なんですか。（掛圖を指して）
△それは　うまです。（一人々々に）

2　提示

〇こゝに　なにが　ゐますか。（自問）
そこに　うしが　ゐます。（自答）
こゝに　なにが　ゐますか。（自問）
そこに　うまが　ゐます。（自答）
こゝに　なにが　ゐますか。（自問）

そこに　ねこが　ゐます。（自答）
こゝに　なにが　ゐますか。（自問）
そこに　いぬが　ゐます。（自答）
こゝに　なにが　ゐますか。（自問）
そこに　にはとりが　ゐます。（自答）
こゝに　なにが　ゐますか。（自問）
そこに　あひるが　ゐます。（自答）
○これは　なんですか。（掛圖の牛を指して）
△それは　うしです。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖の牛を指して）
△そこに　うしが　ゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（掛圖の馬を指して）
△それは　うまです。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖の馬を指して）
△そこに　うまが　ゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（掛圖の猫を指して）
△それは　ねこです。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖の猫を指して）
△そこに　ねこが　ゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（掛圖の犬を指して）
△それは　いぬです。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖の犬を指して）
△そこに　いぬが　ゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（掛圖の家鴨を指して）
△それは　あひるです。（一人々々に）

○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖の家鴨を指して）
△そこに　あひるが　ゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（掛圖の鷄を指して）
△それは　にはとりです。（一人々々に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖の鷄を指して）
△そこに　にはとりが　ゐます。（一人一人に）
○あれは　なんですか。（掛圖の中の、遠くに畫かれてゐる牛を指して）
△あれは　うしです。（一人々々に）
○あそこに　なにが、ゐますか。
△あそこに　うしが　ゐます。
○あれは　なんですか。（掛圖の中の、遠くに畫かれてゐる犬を指して）
△あれは　いぬです。（一人々々に）
○あそこに　なにが　ゐますか。（掛圖の中の、遠くに畫かれてゐる犬を指して）
△あそこに　いぬが　ゐます。（一人々々に）

3　總括

○こゝに　なにが　ありますか。（黑板に苹果（りんご）の略畫を畫いて）
△そこに　りんごが　あります。（一人一人に）
○こゝに　なにが　ゐますか。（黑板に猫の略畫を畫いて）
△そこに　ねこが　ゐます。（一人々々に）
○あそこに　なにが　ゐますか。（黑板上、遠くの方に馬を畫いて）
△あそこに　うまが　ゐます。（一人々々

に)

○あそこに　なにが　ありますか。(黒板上、遠くの方に橋を畫いて)

△あそこに　はしが　あります。(一人一人に)

○あそこに　なにが　ゐますか。(掛圖を指して)

△あそこに　うしが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ゐますか。(掛圖を指して)

△あそこに　うまが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにと　なにが　ゐますか。(掛圖を指して)

△あそこに　うしと　うまが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにと　なにが　ありますか。(教室の入口を指して)

△あそこに　ばうしと　かばんが　あります。(一人々々に)

○そこに　なにが　ありますか。(學習者の机の上を指して)

△ペンと　えんぴつが　あります。(一人一人に)

○そこに　どなたが　ゐますか。(學習者の傍を指して)

△こゝに　□さんが　ゐます。(一人一人に)

○そこに　どなたと　どなたが　ゐますか。

△こゝに　□さんと　○○さんが　ゐます。(一人々々に)

三　備　考

(一)　ハシのアクセントに注意して、箸(ハシ)、端(ハシ)と混同しないやうに、ンマがウマにならないやうに導くことが肝要である。ンマはmmaを表記したのである。

(二)「ゐます」の用法を學習させるのに適當した實物を準備することが困難であると思はれるから、主として掛圖や黒板上の略畫によることにしてゐるけれども、日本語指導の的確を期するためには、臨機に、その場所から觀察することができるものを擇ぶのにまさることはない。掛圖や略畫を用ひるのは、やむを得ない結果である。

第三十課　（第二十八頁）

一　教材

ソコニ　イヌガ　イマスカ。
ハイ、イマス。
アソコニ　ネコガ　イマスカ。
イーエ、イマセン。
構文　〇〇ニ　〇〇ガ　イマスカ。
イーエ、イマセン。
語彙　イヌ　ネコ
符號　ヌ　ネ
〔教具〕掛圖（犬・猫・鷄・牛・馬・家鴨等の）。

二　指導

(一)　要領

1　前課の復習を試みながら、それに疑問の「か」を添へて問の形にしたり、肯定・否定の答を加へたりして存在型を擴張するのが本課の要領である。

2　前課が存在の敍述型であつたのに對して、本課がそれの問答型になつてゐるのは著しい構文の發展であるが、事實に於ては指示の敍述型からそれの問答型に進んだのを始め、存在の「あります型」でも同樣な發展の仕方を學習して來たのであるから、「ゐます型」に於けるこの發展の仕方は、極めてたやすく修得せられるものと思はれる。

(二)　問答

1　復習

〇これは　なんですか。（掛圖を指して）
△それは　いぬです。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖を指して）
△そこに　いぬが　ゐます。（一人々々に）
〇これは　なんですか。（掛圖を指して）
△それは　ねこです。（一人々々に）
〇こゝに　なにが　ゐますか。（掛圖を指して）
△そこに　ねこが　ゐます。（一人々々に）

その他、牛・馬・鷄・家鴨等の掛圖によつて十分に練習させる。

2　提示

〇そこに　ほんが　ありますか。（掛圖ま

たは黒板上の略畫によつて)

△はい、あります。(一人々々に)

○そこに　うまが　ゐますか。(掛圖または黒板上の略畫によつて)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○あそこに　ばうしが　ありますか。(入口のあたりを指して)

△いゝえ、ありません。(一人々々に)

○あそこに　うしが　ゐますか。(窓の外を指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○そこに　いぬが　ゐますか。(掛圖を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○あそこに　ねこが　ゐますか。(掛圖を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○そこに　いぬが　ゐますか。(學習者の席を指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○あそこに　ねこが　ゐますか。(窓の外を指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○本を出し、繪畫を見せながら、符號についていはせる。

ソコニ　イヌガ　イマスカ。

△**ハイ、イマス。**

○**アソコニ　ネコガ　イマスカ。**

△**イーエ、イマセン。**

○本から離れて、

そこに　あひるが　ゐますか。(學習者のあたりを指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○そこに　にはとりが　ゐますか。(學習

者のあたりを指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○あそこに　うまが　ゐますか。(窓の外を指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○あそこに　うしが　ゐますか。(窓の外を指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○あそこに　ねこが　ゐますか。(窓の外を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○あそこに　いぬが　ゐますか。(窓の外を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

3　總括

○こゝに　いぬが　ゐます。(掛圖を指して。以下も同じ。)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○こゝに　ねこが　ゐます。

こゝに　にはとりが　ゐます。

こゝに　あひるが　ゐます。

こゝに　うまが　ゐます。

こゝに　うしが　ゐます。

○そこに　いぬが　ゐますか。(學習者のあたりを指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○そこに　うしが　ゐますか。(學習者のあたりを指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○そこに　あひるが　ゐますか。(學習者のあたりを指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○あそこに　ねこが　ゐますか。(窓の外を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○あそこに　にはとりが　ゐますか。（窓の外を指して）
△はい、ゐます。（一人々々に）
○あそこに　うしが　ゐますか。（窓の外を指して）
△はい、ゐます。（一人々々に）
○そこに　□さんが　ゐますか。（隣席の學習者の名を指して）
△はい、ゐます。（一人々々に）
○そこに　□さんが　ゐますか。（缺席者の名をいつて）
△いゝえ、ゐません。（一人々々に）

三　備考

(一) イヌのヌは、時にノに訛ることがある。注意して指導することが必要と思はれる。

(二) 前課以來「○○に○○がゐますか。」といふ構文を學習させるよりも前に、「○○になにがゐますか。」といふ構文を出したのは、既に「です型」と「あります型」で「なに（なん）」といふ疑問詞の用法は練習してゐるはずであるから、「○○に○○がゐます。」を學習者にいはせるために早く提示した。

(三) 「はい、ゐます。」「いゝえ、ゐません。」といふ答が、「はい、あります。」「いゝえ、ありません。」といふ答とはつきり區別して自由に用ひられるやうに練習をつませることが必要である。

第三十一課　（第二十九頁）

一　教材

アソコニ　ナニガ　イマスカ。
ニワトリト　アヒルガ　イマス。

構文
語彙　**ニワトリ　アヒル**
符號　**ル**

〔教具〕掛圖（鷄・家鴨・犬・猫・馬・牛等の）。

二　指導

(一) 要領

1 「なにが」といふ疑問詞の用法は、既に「あります型」で練習してあるから、前々課から用ひて來た。

「と」の用法も既に學習してゐる。これ

また復習の域を出ないものである。

2　補充教材として「どなたが」を用ひ、固有名詞としての「□さん」や普通名詞としての「せんせい」「せいと」などに適用して、この構文の練習を十分にしたい。

(二)　問　答

1　復習

○こゝに　ペンが　あります。(卓上のペンを指して)

こゝに　えんぴつが　あります。(卓上の鉛筆を指して)

こゝに　ほんが　あります。(卓上の本を指して)

こゝに　かみが　あります。(卓上の紙を指して)

その他。

○こゝに　ペンが　ありますか。(卓上を指して)

△はい、あります。(一人々々に)

○そこに　かみが　ありますか。(卓上を指して)

△いゝえ、ありません。(一人々々に)

○こゝに　うまが　ゐます。(掛圖を指して)

こゝに　うしが　ゐます。(掛圖を指して)

こゝに　あひるが　ゐます。(掛圖を指して)

こゝに　にはとりが　ゐます。(掛圖を指して)

こゝに　いぬが　ゐます。(掛圖を指して)

こゝに　ねこが　ゐます。(掛圖を指して)

その他。

○こゝに　うまが　ゐますか。(掛圖を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○こゝに　うしが　ゐますか。(掛圖を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○こゝに　いぬが　ゐますか。(掛圖を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

○あそこに　□さんが　ゐますか。(掛圖を指して)

△いゝえ、ゐません。(一人々々に)

○そこに　□さんが　ゐますか。(隣席の學習者を指して)

△はい、ゐます。(一人々々に)

2　提示

○こゝに　なにが　ゐますか。(掛圖を指して)

△うまが　ゐます。(一人々々に)

○こゝに　なにが　ゐますか。(掛圖を指して)

△うしが　ゐます。(一人々々に)

○こゝに　なにが　ゐますか。(掛圖を指して)

△うまが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ゐますか。(高く掲げた掛圖を指して)

△にはとりが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ゐますか。(高く掲げた掛圖を指して)

△あひるが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ゐますか。(高く掲

げた掛圖を指して)

△にはとりが　ゐます。(一人々々に)

○こゝに　なにが　ゐますか。(掛圖の牛と馬を含めた範圍を指して)

△うしと　うまが　ゐます。(指導者も和して一人々々に)

○こゝに　なにが　ゐますか。(掛圖の犬と猫を含めた範圍を指して)

△いぬと　ねこが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　なにが　ゐますか。(高く掲げた掛圖の、鷄と家鴨を含めた範圍を指して)

△にはとりと　あひるが　ゐます。(一人一人に)

○本を開かせ繪畫の中の鷄を指して、これは　なんですか。といふ。

△にはとりです。(一人々々に)

○黒板に

ニワトリ

と書き、

ニ・ワ・ト・リ——ニワトリと數回いふ。

△**ニ・ワ・ト・リ——ニワトリ**　(一人々々に)

○また、繪畫の中の家鴨を指して、これは　なんですか。といふ。

△あひるです。(一人々々に)

○黒板に、

アヒル

と書き、

ア・ヒ・ル——アヒルと數回いふ。

△**ア・ヒ・ル——アヒル**　(一人々々に)

○本を開かせて、

アソコニ　ナニガ　イマスカ。

ニワトリト　アヒルガ　イマス。

と數回いふ。

△**アソコニ　ナニガ　イマスカ。**

ニワトリト　アヒルガ　イマス。(一人一人に)

○あそこに　どなたが　ゐますか。(入口に學習者の一人を立たせて)

△□さんが　ゐます。(一人々々に)

○あそこに　どなたが　ゐますか。(入口に學習者を二人立たせて)

△□さんと　○○さんが　ゐます。(指導者も和して一人々々に)

3　總括

○ぼうしは　どこに　ありますか。(入口に掛けてある帽子を指して)

△ぼうしは　あそこに　あります。(一人一人に)

○には　とりは　どこに　ゐますか。(窓の外を見て)

△には　とりは　あそこに　ゐます。(一人一人に)

○□さんは　どこに　ゐますか。(隣席の學習者の名をあげて)

△□さんは　こゝに　ゐます。(一人一人に)

○□さんの　ほんは　どこにありますか。(一學習者の本を卓上に持來つて)

△□さんの　ほんは　そこに　あります。(一人々々に)

○あなたの　ほんは　どこに　ありますか。

△わたくしの　ほんは　こゝに　あります。(一人々々に)